

両親に対し本当の親だろうかとかしら
違和感を持つことがあったとしても、それは
子供の頃に誰しも一度や二度は経験してみ
たわいの無い勘ぐりだったと、後になって笑
って済ませている。

それがある日突然事実だと告げられた時の
ショックは経験した者でなければ分らないこ
とだろう。本人にとって一番大事な、生きて
いる証である自分のアイデンティティーが否
定されたことになる。また実の両親が死んで
しまっている場合、その距離は永久に近づく
ことが出来ない。

まして実の父となる人を知る母が、実父に
関する情報を何も残さず突然他界してしまっ
た後では、自分が誰だか知るすべも全て無く
なっていた。私は文字通り天蓋孤独の身にな
ってしまった。

地域住民の三分の一が死ぬほどの空襲を受

け、幼なじみや知り合いに多数の犠牲者が出たにも関わらず我が家は全員無事だった。父も出征から無傷で帰り、我が家の家族には戦争の被害は皆無だと思っていた。それまで大きな悲しみや苦しみと無縁であったと信じて生きてきた私は、東京の私大入学早々来た叔母からの手紙で、私自身が真っ先に戦争被害を背負って生まれてきた事実を知らされた。私の人生はスタート時点にして負の遺産を背負っていたことになる。

その手紙で「お婆ちゃん」と呼んでいた人が実の母親だったと伝えられた時は何とも言いようの無い悲しみで一杯だった。しかも「お婆ちゃん」に性の手ほどきを受けていたという事実が重く暗く私にのしかかっていた。

精神的には人間のすべての暗部と不幸を抱えているような気持ちで、悄然となっていた。大学も特別希望する学校が無かったとはいえ、国立の一流と言われているところに居

ない自分が恥ずかしかつた。私の大学生活は何も明るい材料が無いままスタートした。大学の選別の方法に異論があつたとしても努力をした者が報われるというのは、少なくともフェアな仕組みとは言えるだろう。どんなに持論を展開してみても受からなかつた者の声はゴマメの歯軋りとしか聞いてもらえない。ただ若者の可能性をこんな方法で選別していいのか、という疑問は依然として残つていた。個人で確立された制度に反発するのは単にフラストレーションが溜まるだけで、何の解決にもならないことは良く承知していた。それでも嫌なものは嫌だという自分の我の強さに辟易することもあつた。

悩むのが若者の常であればいかにも若者らしいと言えたが、実態は倣岸と不安が同時に存在し、自分の精神のバランスを取るだけでも大変だつた。厭世的になりがちで、良く分らぬままカミュの不条理の文学に強く引かれ、予定調和の人生を頭から否定していた。

俗物根性とか小市民的生活といったものに嫌悪を覚え、野垂れ死んでも孤高を保つと一人粋がっていた。ただ貫くだけの意志の力が弱かった分、覚めていくのも早かったのだろう。文学を志してはいたがいつの間にか興味も薄れ、一番嫌っていた小市民への道を確実に歩み始めていたようだ。「所詮自分はその程度だ」と拗ねていたのが自分に対する的確な分析で、一番正確な自己評価だったとも言えるだろう。

五月初めの叔母からの手紙で、おばちゃん
が白血病で亡くなったことと、同時に実母で
あることを知らされた衝撃は後を引いてい
た。おばちゃんが死んだという知らせだけで
も充分過ぎるほど痛手だったが、それまで知
らなかつた自分の生い立ちの真実は、私に別
の種類のショックを与えていた。
私はかなり精神的に落ち込んだままだった。
た。

大学に関しては自分なりには整合性があつても、世間の評価と違う道を選んだ自分が本当は能力が無くて、ただ落ちこぼれているのではないかという疑問も根底には残っていた。何の希望も持てない暗い日々だった。そんな覇気の無い私に気が付いたのか、下宿していた家の教授夫人も心配して声を掛けてくれた。かつて学生時代に叔父の家庭教師だった大学教授の家に用心棒代わりに下宿したが、慣れない東京生活でやることが多く奥さんとゆっくり話す機会も無かった。

「何か心配事でもおありかしら？元気が無いみたいで顔色もよくないわね」

夫婦というには年の差があり過ぎ、若くて魅力的な奥さんに何かしら気恥ずかしい思いでそれまで気軽に話が出来なかった。くだけた口調で話し掛けられ、何となくあつた緊張感や壁が無くなり素直に反応することが出来た。

「可愛がってくれた叔母が亡くなったと手

紙が来たもので・・・」

私の語尾は小さくなった。同時に私は全てを語るのを躊躇していた。

「そうだったの。御免なさい悪いこと聞いたみたいね」

改まった顔で私を見つめるとすぐにまた明るい口調で「今日から主人は東北での学会に出掛けたので、夕飯と一緒に食べましょう」と誘ってくれた。国立大学の医学部教授で、とは私も事前に叔父から聞いていた。子供が無く、学会のため出張が多いことや、時には奥さんも同伴するため私が留守番代わりの下宿人として迎え入れられたらしい。食事は気楽な外食が性に合っているので断り、部屋だけ借りていた。休みの日は「一緒に食事しましょう」と奥さんに何度か誘われたが最初の歓迎の夜だけ受けて後は約束があるという理由をつけて断り、外に食べに出掛けていた。日曜日の今日も何処に行こうかと考えて

いたとこだった。

まだ学校では友人も出来ず、同じ郷里の高校時代の同級生とは連絡も取っていなかった。親しく話す人も無く、孤独というのはこういう状態を言うのだろう、と一人合点して悶々とした日を送っていた。人恋しい思いをしていた時でもあり、私は奥さんの夕食の誘いに喜んで従った。

「ありあわせで御免なさい」と奥さんに言われたが私にとってはご馳走だった。なににより久し振りの家庭料理と奥さんの笑顔に救われる思いだった。食事の後、香りのいいコーヒーが出された。清潔感にあふれた奥さんのたたずまいに眩しい思いをしながら、私は意味も無くスプーンでコーヒーをかき回していた。

「あなたの叔父さんから伺ったのですけど修さんはすごく頭が良いんですってね」

叔父から私は一度もそんなことを言われたことが無かった。叔父は旧帝国大学の工学部

出身だったが、私のことをただ見ているだけで一切口出ししなかった。また私も自分の進路を含め相談したことも無かった。教授の家に下宿させるため誇張して売り込んだのだろう。

「頭が良ければもう少しましな学校に入っていますよ」と自嘲気味に応えた私に奥さんはたたみ掛けた。

「あら、頭の良さと大学とどういう関係があるの？一般的にはそう判断されているようですが、主人の話では教え子にも頭の悪い学生が多いですよ」

日本で一番難しいとされている大学の医学部は、難しいが故に受けるという受験生がいるほどだが、教授は後輩を覚めた眼で見ている様だ。

「主人は、ましなのは三分の一で、残りの三分の二が見事にアホと並みに二分されるといつも言っているのよ。毎年この分布は変わらないと言って、自分で三分の一の法則と名付

けているのー

おかしそうに笑いながら奥さんは説明してくれた。考えてみれば奥さんとゆっくり話すのは今日が始めてだった。毎日挨拶しているので何となく親しみを感じていたが、私は奥さんのことは何も知らなかった。年の離れた教授が保護者みたいな眼で奥さんを見ていたのを最初の食事の時感じていた。どう見ても著名な医学部教授の奥さんという風情ではなかった。かといって軽薄な感じでもなく、育ちのいい屈託の無いお嬢さんというのが私の感想だった。話してみるとますますその感を強くした。この天性の明るさは何なのだろう。落ち込んでいた私には奥さんとの食事や会話はいい気分転換になっていた。

「二人で居るとまず夫婦と見てもらえないのよ。主人がもうすぐ還暦を迎えるのに私はまだ三十五歳、二周り近くも離れていれば誰も夫婦とは思わないわね」

奥さんから歳を聞くまで私はもっと若いと

思っていた。教授もそういえば若く見え、とても還暦を二・三年後に迎えるような歳には見えなかった。

その夜、私は殆ど聞き役で奥さんの多岐に渡る話に黙ってうなづくだけだった。何かテーマがあれば話も出来るが、若い私にはいわゆる世間話が苦手だった。特に年上の女性相手だと何を話していいのか見当も付かなかった。或いは普段の精神状態だったらもっと闊達に話が出来たのかもしれない。人が知り合う時、通常なら差し障りの無い出身地や趣味、といった相手にあまり気を使わないで済む話題から徐々に話が進むのが普通だろう。叔父の紹介で前段が省かれていたこともあったせいか、奥さんはあたかも古くから知り合いの友人に話しているような口調で何の屈託も無く自分のことや、教授との出会いと結婚に至った経緯を詳しく語ってくれた。

再婚だと決め付けていた教授が初婚だった

こと、しかも驚いたことに夫人の方が教授との結婚に積極的だったことも分った。心の底に澱んでいた滓がいくらか少なくともいつていくのが感じられた。どんなことでもいから私には何かのきっかけが必要だった。自分でも求めていたのだったが、どんよりと覆いかかるものを早く振り払いたかった。考えれば考えるほど先鋭化し、出口の無い長くて暗いトンネルの中にいた。明かりでも出口の兆候でも早く見つけて、この泥沼みたいな精神状態から逃れたいと願っていた時期だった。

大したことを話した訳でもないのに私の気持ちには随分楽になった。人と話したことが良かったのか、相手が奥さんだったから良かったのかは判断がつかなかった。たぶん大人の奥さんが私に気を使って明るく振舞ってくれたのが良かったのかもしれない。

「良かったら家のお風呂いつでもどうぞ」

と奥さんは勧めてくれたが私にはまだ遠慮があった。銭湯に慣れてない私は混んでいる時間や、たくさんの人が入った後の入浴はどうしても生理的に受け付けなかった。早く行って入浴するか、最後に行って湯船に入らず頭と身体を洗って掛け湯して帰るかの、どちらかだった。

私はお湯を通して体の接触があることに抵抗と、後から入る人へのある種の後ろめたさを感じていた。そんな感覚がある間は奥さんの誘いに乗る気にはなれなかった。

話題が何であれ、二人きりで食事した後には話し合ったことで今までの垣根が突然無くなったような気がした。何でもないことが私には大いに救いになった。彫りの深い夫人の容姿にある種憧れみたいな感情が初対面の時からあったが、それが少し身近なものになった。

ささくれ立ったものが幾らか影を潜め、久し振りに安らかな気分になれた。

校門から大学のキャンパスに続く長くうねった歩道に、入学当時は咲き乱れていた遅咲きの八重桜の濃い目の花はすっかり落ちてしまいい、立派な桜並木は残った緑の葉だけが強くなりかかった陽射しに輝いていた。いろいろな種類の「入部歓迎」の立て看板も今や無くなり、新入生はもはや客扱いはされていないなかつた。

入学はしたものの依然として目的も何も無かつた。この大学に果たしていつまで居るのだろうかと自分でも疑問に思っていた。人並みの努力をして、もう一度受験に挑戦しようという気もいくらか残ってはいた。しかし否定したものに對し今更気を取り直してやり直すというののも積然としなかつた。それでも未練がましく教養課程では受験に必要な科目を優先させていた。自分の価値観に確固とした信念はなかつたようだ。

友達も出来ず、と言うより作らず、暇な時

は学校の図書館で過ごすことが多かった。経済学部を選んだものの、自分が何をしたいのか全く分らない儘に文学書に逃避していた。文字は追っていてもいつの間にかおぼちゃんのことを考えており、起こった事実が複雑な影を投げ掛けていた。いい思い出なのか忌まわしい記憶なのか考えたくなかった。私は出来るだけそのまま受け入れ、世間の価値観を無視する事にしていった。そうすることで辛うじて精神の安定を保っていた。読んだ本の数は増えたが充足感はあまり無かった。

図書館では自然と自分の席が決まり、常連の顔も何人か識別出来るようになった。大正期に建造されたと言われている木造の洋風図書館は大きな木立に囲まれ、歴史を感じさせる建物だった。利用する学生の数は比較的少なく、いつも静まり返っていた。それでも幾らかある人の出入りを避け、一番奥まった角の席に私の場所を求めた。窓際のやは

り奥まった角の席に、いつも見る女子学生の顔があった。化粧気が無く素顔に口紅だけ、というのが彼女の第一印象だった。何度か通う内に目が合うと、いつとはなく会釈が始まっていた。女子学生の比率は三分の一か四分の一くらいの印象があり、私の専攻している経済学部にいたっては数えるほどだった。会釈が始まってから女子学生の中に彼女を探すようになったが、彼女の姿を図書館以外の場所で見掛けたことはなかった。私は自然と救いを求めるが如く誰かを探していた。優しい目を向けてくれる人だったら誰でも良かった。恋とか愛とか大げさなものが必要ではなかった。私とおばちゃんのこととは到底他人には理解出来るものではない。人に相談出来ない悩みと孤独感が私を苦しめ、答えの出ない難問を抱えて幾ばくかの救いを求めていたのだらう。

そんな時突然彼女から思いがけないアプロ

―チがあつた。

「万年筆持つてらっしゃる？」

あたかも旧知の友人に話すような口調で彼女は微笑みながら近づいて来た。土曜日の午後の図書館は数えるほどの学生しか居なかつた。黙って差し出した万年筆を手には彼女は「一寸お借りします」と言つて自分の席に戻つて行つた。私が来た時彼女が座つていたのは分つていたが、何か資料調べに没頭していたらしく何冊もの本を開いたまま下を向いていた。

専攻の経済学や学校の授業にたいして興味の無い私には、図書館は単に読みたい本を持ち込んで時間を過ごすところだった。そう言えば彼女はいつも何かを調べているみたいで、今日のように何冊も本を開いていた。前に読んでいたカミュの「転落」を読み返していたのだが、別に新しい発見は無かつた。時として二度目の読書で新たに気が付くことがあり、閉ざされた自己満足の世界で新

しい発見の喜びを感じることもあった。だが予期せぬ彼女の話し掛けで現実に戻ってしまった。いい、すでに知っているストーリーの活字だけを追っていた。

私が読み終わるのを見計らったかのように彼女は近づいて来て「どうも有難う御座いました」と前とは打って変わって丁寧な挨拶をした。私は黙ったまま万年筆を受け取った。彼女は慌しく席に戻ると机の上に散らばっていた本と書類を手際よく集め、大きめのバッグに入れるとすぐに図書館を出て行った。私も間を置かず席を立ち駅に向かった。何でもない出会いだっただが図書館に長居する気が無くなっていた。それに、もし彼女が駅に向かっているのであれば追いつく可能性もあった。だが駅にもホームにも彼女の姿を見つめることは出来なかった。帰宅の電車の中で気の利いた返事も出来なかつた自分に腹を立てていた。気後れしたのが分っていたただけに、自分の情けなさが悔や

まれた。それ以上に、そんなことで思い悩んでいる自分が嫌になっていった。それだけ気にしているのは私がすでに彼女を意識していたからだろう。だが最初の出会いでこんな対応をしていては何も始まるはずがなかった。

時が一番人の痛みを癒してくれると言うが、私の中でも徐々に変化していくものがあった。正確には答えを求めずただ開き直っただけかもしれない。自分の置かれた状況をどんなに分析してみても納得いく答えが出るものではないし、解決法があるわけでもなかった。事実をそのまま受け入れ、それに慣れるだけだった。

切り裂いた生傷に時が瘡蓋を与えてくれるように、少々の傷跡が残ったとしても、痛みが去り皮膚に同化するのをひたすら待つしか方法が無かった。

投げやりで消極的な生活態度に変化が出てきたのをいくらか実感出来た。むしろこのままでは何も出来ないという危機感が私を目覚めさせたのかもしれない。

教授夫人との食事や、図書館での彼女との出会いをきっかけに私の中に何か芽生えたものがあったようだ。同時にそれは私の中に厄介な感情を生じさせていた。特に遠い存在で

あつた教授夫人が二度三度と二人での食事の
回数が増えるにつれ身近な存在になり、気に
なる異性へと変化していった。

初夏とも言える七月初旬教授夫人から夕食に誘われた。奥さんはブラジャーの透けて見えるノースリーブのシャツで私の前に座っていた。私はその胸の大きさに圧倒されてしまった。世間一般ではこんな姿の女性を見ることはあまり無かった。まさに雑誌のグラビア写真から出てきたモデルといった格好だった。無防備に上げる腕の付け根にかすかに残る腋毛の剃り跡が私に女を強く意識させた。私を男として見てないのか、或いは単に無邪気なだけなのか、奥さんの振る舞いは極めて自然に見えた。弱くした扇風機の風が規則的に送ってくる奥さんの香りは、柑橘系のむせ返る匂いがし、私の内にある男の部分を強く刺激した。

その夜の食事は自分が平静になることに気を取られ、奥さんとの会話は上滑りになり勝ちだった。普段を装う私に奥さんはいつものように屈託無く話し続けた。

今回の関西での学会は全国から泌尿器科の

専門医が出席する大掛かりなもので、教授自身も前立腺の内視鏡的手術に関する研究成果を発表することだった。日本では画期的な手術で、この開腹しない内視鏡での手術が確立されれば患者の肉体的負担が軽減し、入院日数も少なくて済むらしい。アメリカで開発されたこの技術は、教授のライフ・ワークとも言える課題で準備が忙しく、帰りも毎日遅かったとのことだ。そう言えばしばらく教授の顔を見ていなかった。

「おかげでこのところ私なんかほったらかし。挙句の果てに私を連れて行こうともしないのよ」

奥さんは不満げな表現は使っていたが顔は笑っていた。「修ちゃんが居るから安心しているみたい」

最初の頃は「修さん」と呼んでいたが最近では「修ちゃん」に変わっていた。

今回の出張は学会での研究発表のみならず教授自身による、関西にある大学病院での臨

床手術も予定に入っているそうだ。術後患者のケアの問題もあり、帰ってくるのが一週間後の予定ということだった。

「良かったら一週間付き合ってくださいらい？」

もとより奥さんとの食事に異存は無いが、図に乗ってすぐに飛びつくというのとはばかられた。

「有難う御座います」とだけ答え食事の後片付けを手伝った。

教授が居ない時二人で食事するのに当初いささか抵抗があつたが、教授から「遠慮するな」と言われていたこともあって、前ほどは気にならなくなっていた。

食器洗いが終わり手を拭いて後ろを向いた時、私の肘が後ろに立っていた奥さんの胸に触れた。一瞬のことだったが私は狼狽した。奥さんは何事も無かったかのようにただ微笑んでいた。意識した自分を恥じたが私には充分に刺激的だった。私の内に秘められた性的

エネルギーは自分で考えるより圧倒的に大きかった。自分でコントロール出来るかどうか自信がなかった。私の狼狽は秘められた本性を隠すためのリアクションに過ぎなかった。

翌日は奥さんの、たつての頼みで帝国劇場のシネラマ鑑賞に付き合うことになった。土曜日の授業は午前中に終わり、待ち合わせの劇場前には約束の時間に着くことが出来た。一年にも及ぶロング・ランでもあり、客は少なく二階前列にあった私たちの席の周りには映画が始まっても誰も来なかった。おかげで奥さんが買ってきた弁当を気兼ねなく食べる事が出来た。

複数の映写機で投影されている為スクリーンの繋ぎ目に少し不自然な点があっても、その迫力と大音響には圧倒された。ただ内容には見るべきものはなかった。

奥さんは時折私に話し掛け、音響に負けなため口を耳元に近づけてきたが、それが私

には息苦しく感じられた。

話の内容はたわいの無いものだったのに、耳元で話されることで私は女を意識せざるを得なかった。聞きづらく奥さんの方に首を傾けた時、耳に奥さんの唇の感触があった。

単なる偶然の結果が私には強烈な刺激となった。右隣に座った奥さんの時折触れる肩や腕が突然気になりだし、同時に奥さんの香水の香りも強く意識するようになった。

私は自分の中にある雄の本性を悟られないため冷静になろうと努めた。奥さんが相手ではあまりにも飛躍があり過ぎた。だが私の理性は極めて危うい基盤の上にあった。既に私の中では危険なゲームが始まろうとしていた。

自分で作為したのではなくとも、自然の流れの中で関心の強いものに惹かれるのが常だ。意識しないだけで日常から何らかの選択をやっている。殆どが自分の都合のいい判断での選択だが、それさえ気が付いていないだ

けだ。思い込みが激しい、と言うのはそういうことだろう。偶然が織り成した出来事にどれ程の意味が含まれているかは関係無かった。自分がどう受け止めているかだけだった。あらゆる事象に性的な意味を持たせ、自分で葛藤しているだけだった。私の、その時の思考回路を他人が知れば殆ど色情狂としか判断しないだろう。そういう年代だったとしか言いようがない。それでも自制心との闘いは続けた。

映画が終わって外に出たらまだ真昼の明るさだった。暗い密室の中で膨らんだ私の妄想も初夏の太陽の光にはじけ散った感じだった。買い物をしたという奥さんに付き合っ
て高級そうな店を何軒か回ったが、これまでの私には縁のない世界だった。教授夫人は常連の上客なのか、店では大事にされ名前と呼ばれていた。堂々とした夫人の振る舞いは演出された芝居の場面を思わせた。

その芝居は夕食まで続き、教授と夫人が結婚を決めたフランス料理のレストランが仕上げの場所になった。気後れしまいと思っても慣れないことにはどう対処していいのか分らなかった。私は素直に従うしかなかった。

奥さんは店のマスターに私の事を「甥っ子」だと紹介し、彼の薦めた赤ワインを私のグラスにも注がせた。マスターの話だと教授と結婚を決めた夜に出したものと同じのとどこだったか、奥さんは銘柄までは覚えていなかった。

こういった場面は外国映画で観ることはあっても自分がそういった場所に居ることが信じられなかった。日本にこういったレストランがあることさえ知らなかった。手の込んだ料理の味より値段が気になった。場違いのところにいるという意識が私を疲れさせた。幾らか慣れたのはワインの酔いが回ってきた後だった。

テーブル・キャンドルの光に映された奥さ

んの顔は彫りの深さを際立たせ、ワインのせいか眼が潤んで見えた。正に絵になる姿だった。貧相で半端な服しか着ていなかった私とではとても釣り合いが取れなかった。

「修ちゃんの顔って国籍が分らないわね。いずれにせよ日本人の顔ではないみたい」

髪の毛も目の色も黒かったが子供の頃から聞きなれた質問だった。

「先祖の誰かが外国人と浮気したのかも知れませんかね」

ワインのせいか自然と軽口が出た。体質なのか酒には強いという自覚があつた。酒に対する免疫は中学の頃から既に出来ていた。タバコも大学入学と同時に吸い始めていた。大人への道を歩み始めてはいるものの、全てが付け焼刃で様になっていなかった。こういった場所での食事やワインを何の違和感も無く楽しむには時が必要なのだろう。

デザートケーキとコーヒを断りブランデーにした奥さんは、いつもより饒舌だっ

た。

夫人の初恋の男性が逞しい見掛けと男らしい風貌に関わらず小心者だったことが、あるきっかけで分り、別れたという逸話は思わず笑ってしまった。大学時代文化クラブの先輩である初恋の人としかるべき旅館に入ったが、その先輩が舞い上がってしまった落ちて着かず、その上男性のものが小振りだったので先に風呂を出、先輩を残したまま帰ったとのことだった。「私その時処女だったのよ」と笑いながらコメントする彼女に奔放さを感じた。

私を大人として扱っているのか、挑発しているのか判断が付かなかった。私の考え過ぎだろうと思うしかなかった。

処女が男性器のサイズで相手を選ぶの难道かという疑問は残ったがそれ以上追求するのは遠慮した。

食事が終わり店を出る時には勘定を精算するでもなくただ「ご馳走さま美味しかった

わ、近い内にまた」と年配のマスターに挨拶
しただけだった。

両手に買い物袋を提げた私の右腕に自分の
腕を絡め、幾らか私の方に体重を掛ける体勢
で歩き出した。右腕に押し付けられた乳房が
嫌でも意識された。

「酔ったのでタクシーで帰りましょう」と
奥さんは表通りで車を拾い、先に乗ってしまった。
荷物を助手席に置いて乗り込んだ私に
又腕を組んできた。薄着の季節の上着は身体
の線をはっきり出すと同時に、むせ返るよう
な女の匂いまで伝えてきた。酔った上での行
為か、意識しての接触なのか私は判断に苦し
んだ。奥さん以外の女性なら私も気軽に、誘
いじみた行為に反応しただろうが奥さん相手
では、そういう訳にもいかなかった。私の最
低限の自制心だった。
しかしその自制心も長くは続かなかつた。
奥さんは私の右肩に頭を乗せ、腕を組んだ
まま私の手を握ってきた。

戸惑いと驚きで私は奥さんのなすがままに
していたが、手の握りに強弱が出てきたのを
きっかけに私も握り返した。酒に酔った女性
に判断力が無いのをいい幸いと応じたのでは
なかった。せめてもの男のプライドは保ちた
かった。奥さんは飲んではいたものの酔って
正気を無くするほどではなかった。大胆にな
ったのは酒のせいだろうが、少なくとも酔っ
た弱みに付け込んで私が行動を起こしたと自
分では思いたくなかった。

「眠くなつたので横になるわ」と言う上
体を私の方に傾け頭を膝の上に落として来
た。

大柄な身体を預けてきたため私は席をずら
し、奥さんの寝やすい体勢を取った。上を向
いた彼女の目は微笑んでいた。運転手を意識
しての言葉に違いなかった。私も「少し飲み
過ぎましたね。寝ていて下さい、着いたら起
こしますから」と調子を合わせ、奥さんの手
を撫でていた。至近距離に第三者の運転手が

居るため言葉は途切れたが、奥さんの手は私の大腿部からお尻や腰の方まで動き回った。私もおおずおおずと同じように空いた右手で奥さんの身体をなぞった。奥さんの乳房に思い切って触ってみても、奥さんはその手を強く握り返しただけで拒否するような反応は無かった。むしろ強く握り返したのを催促の意味に解釈し、無言のまま撫で回した。たっぷりと重量感のある柔らかい乳房だった。さすが直接接触するのは遠慮したもの、薄着の季節で感触は生のままに近かった。ただ困った事に私の下半身は反応を起こし、勃起したものの先端が奥さんの頭部に時折触れていた。女性の経験はあるし、奥さんの初恋の先輩みたいに取り乱すことはなかった。ただ教授の奥さんという事実が私にブレーキを掛けていた。横になった無防備な下半身はフレアのスカートを少し捲れば手を出せたが辛うじて自重していた。酔った上での軽い戯れという弁解の余地を残すのが奥さんのためにも自分

のためにも良かった。下半身や乳房への直接タッチを避けたのは私に残された、ぎりぎりの良識だった。女性を知った若者の余裕だったのかもしれない。

一時間足らずの車中、無言のまま奥さんとのやり取りは続いていた。奥さんがどういうつもりなのか知る由も無かったが、若い男にとってには理由など必要無かった。魅力的な女体が私の膝の上に横たわっていて、互いに身体を撫であっているだけで充分だった。

「この先を左に入ってください。先に大きな街灯がありますからその辺りで止めて下さい」と運転手に告げると、「着きましたよ。起きて下さい」と眠っていない奥さんに声を掛けた。

奥さんは頭を上げ、身体を起こし始めた時右手で私の勃起した性器を握ってきた。彼女は気が付いていたのだ。

暗い玄関に入り、鍵を閉めるやいなや奥さ

んは私に抱きついてきた。荷物を両手に持つ
たまま立っていた私に口を寄せ、音が出るほ
ど強く吸い始めた。床に荷物を置き、奥さん
を抱きしめたが奥さんは首に巻いた両腕にま
すます力を入れてきた。

右手を首から離すと私の勃起したものを探
り、握り締めてきた。同時に自分の下半身を
私のほうに擦り付けてきた。あたかも同じこ
とを催促しているような動きに私も右手で彼
女の薄いフレアのスカートをめくり下着をま
さぐった。下着の底の部分にはかなりの湿り
気があった。

久しぶりの女体にいささかの焦りはあった
ものの、私は手馴れた指使いで奥さんのもの
を撫で回した。湿り気が増えると共に奥さん
の口からため息と喘ぎの声が出始めた。
奥さんは慌しく私のズボンの前を開くと私
のものを取り出し、直接接触してきた。私も奥
さんの下着の隙間から手を入れてその割れ目
に沿ってなぞった。大きな陰核の感触が中指

にあり、女性器は驚くほど濡れてぬめっていた。口を合わせたままの不安定な体勢でお互いに性器を撫で続けた。

奥さんはつらそうな声を出し始め、膝に力が入らなくなってきた。

子供の頃は大きな喜びがいくつもあった。小学生の頃、革の野球グローブを買って貰った時は枕もとに置き、翌日はとてつもなく早く起きて手にはめてみた。まだ革のグローブが珍しく、当時は簡単に小学生が持てるものではなかった。昭和二十五年はそういう時代だった。

月刊誌の「少年」の発売日は前日から待ちきれず、当日は全速力で学校から家へ走って帰り本屋に駆けつけた。子供向けに何冊かの月刊誌が出ていたが、買って貰えるのは一冊だけだった。友達が別の種類を買い、交換して読んだ。欲しいものがたくさんあり、それでも手に入るのはわずかだった。憧れが大きい

いだけに喜びも大きかった。めったに無いから感激も大きく、文字通り有り難い故にありがたかった。飢餓感が喜びを一層強くしてくれていた。

変な例えだが、私にとって女性は子供の頃のグロープであり、毎月待ち焦がれた本であり、電気屋で売っていた鉱石ラジオだった。ただその喜びには肉体の快樂が伴っていた。

おばちゃんとの関係が社会ではタブーとされてきているため、自分に対し釈明の方法が無く暗い影を落としていた。開き直るのが唯一の解決の方法であり、そのままを受け入れるしかなかった。

教授夫人との関係も本来あってはならないことだろう。二人目の女性となった教授夫人にも手を出すべきではなかった。性の欲望が理性で簡単にコントロール出来るものではないと理解していても、そこにはルールがあるはずだ。受身ではあったが結果として私は教

授夫人を抱いてしまった。私の女性体験はいずれも明るみには出せないものだった。

玄関での慌しい愛撫も、そこそこに中断して私は二階にある自分の部屋に戻り、混乱した頭でどうしたらいいか自分に問い掛けた。そのまま続けたかったがやはり教授の自宅という現実が私にブレーキをかけていた。極めて魅力的な女性が目の前に居て、しかも自分から積極的に働きかけてきているのに私は逃げるように二階に上がってしまった。それでも自分を抑えるべきか、降りて行ってもう一度あの濃厚な場面を再開するべきか迷っていた。火の付いた欲望を抑えるのは容易ではなく、しかもすぐ手に入るのに我慢をし、躊躇している自分に情けない思いもあった。

「お風呂沸いたわよー」という奥さんの明るい声を聞いた途端に、諸々の葛藤は呆気なく消えてしまった。私は反射的に立ち上がり、

同時に腹も決めた。

風呂場に下りて行く時、奥さんは全裸で階段を降りていた。部屋で服を既に脱いできたのだろう。裸のまま階段の途中まで来て私に声を掛けたのだった。

風呂場は思っていたより広く立派だった。奥さんは私の脱衣を手伝うと一緒に入ってきた。想像していた通りの見事な体型だった。突き出た張りのある乳房や大きめのお尻は中年の身体ではなかった。密生した陰毛は黒々と艶があり、面積も広がった。湯船に入る前に奥さんは抱きついてきた。玄関での続きが始まり、無防備な私のものはすぐに奥さんの手に掴まれた。口を合わせたまま互いの秘所をまさぐり始めたが、その動きにはもうお互いに遠慮は無かった。濡れていた女性器はますますぬめりが増え、割れ目の外まで溢れていた。

柑橘系の香水は奥さんの体臭と混じってむせ返るような香りを発し、私の雄の部分を強

烈に刺激した。久しぶりの女体も私を興奮させた。

前夜の食事の時からかすかな予感と期待があつたが、こんなに早く実現するとは思つてもいなかつた。

風呂場での私たちは発情した雌と雄だった。指の愛撫で奥さんは軽く達してしまい、立っておれなくなつて流し場に座り込んでしまった。

教養課程の授業は高校時代の延長みたいなもので、特に英語はこれでいいのかと思うほどのレベルだった。午後の日本史が休講になった為、私はいつもの習慣で図書館に向かった。知的好奇心は無くしてないものの、授業にはどうしても燃えるものを感じなかった。

土曜・日曜にわたり限りなく繰り返された教授夫人との交わりが私に虚脱感を与えていたのかもしれない。肉体の快楽をむさぼり尽くした二日間だった。それでも充足感は無かった。

土曜日だけだったら酔った勢いという弁解が可能だったが、二日目も続いたことで私達には逃げ場が無くなっていた。快楽を伴った男女の究極の行為に、おばちゃんとの時と同じような虚しさと罪悪感が残った。欲しいものが手に入ったのに小学生の頃、革グローブを買ってもらった時のような底抜けの幸福感は感じられなかった。

肉体の快楽を肯定的に捉えることが出来ず、それに相手が教授夫人であることが大きな障害になって重くのしかかっていた。また反面、美人で魅力的な女性との関係を持てた事實は、私に男としての自信を与えてくれた。たいした努力も工夫も必要とせず、ごく当たり前のように入った禁断の実は、少々の後悔があつても食はずにはおられなかつた。おばちゃんとの生活が復活した。そこには又新しい発見もあつた。

本は開いて活字を追つてはいるものの、週末の出来事で頭はいっぱいだつた。

互いの身体を洗いあつて、またそのことが前技となり私達は興奮の極にあつた。指の愛撫で軽く達していた教授夫人は私のものを丁寧に洗い、同じ事を私にも要求した。太股の奥にある溝に沿って石鹸のついた指を這わすと、頂点部分に親指大の突起物の感触があつた。玄関で慌しく弄つた時に中指が覚えてい

た感触だった。経験の少ない私でもその大きさが普通でないことは理解出来た。その大きなものをあくまで静かに指で撫で回し、軽くもみ上げるうちに奥さんの吐息が荒くなつた。お湯と石鹸に塗れた部分に明らかに異質の滑りが増えてきた。顎を上げ、下半身に震えが始まった奥さんを見て、私は指を離し奥さんの秘部をお湯で洗い流した。それ以上風呂場では進めなくなかった。

風呂を出た後私は奥さんを二階の自分の部屋に誘った。同じ屋根の下でも出来る限り教授の影から遠いところに自分を置きたかった。

蒲団に新しいシーツを掛け終わった頃奥さんは浴衣姿で私の部屋に入ってきた。湯上りの香りど、今度は何か動物性の香水が入り混じった濃厚な匂いで部屋の空気が一変した。電気を消そうと立ち上がった私を手で制し、奥さんは浴衣の帯を解いた。浴衣の下には下着は無かった。私の足元に裸のまま座り込む

と私の勃起した性器を口に含み、静かに舌を動かし始めた。風呂場で既に経験していたが奥さんの舌の動きはあくまでも緩やかで、どこに歯があるのか感じさせなかった。明るい電灯の下で長い格闘が始まった。

気が付くと彼女が横に立っていた。本は開けているものの、私の意識は教授夫人との週末の記憶を丹念に追っていた。

「びっくりさせて御免なさい。何か考え事でもしていらしたの？」

とっさの返答に詰まったまま私は彼女に会釈をした。私の性器はその時勃起していた。

「時間がおりなら、お茶でも如何ですか？」

予期せぬことに対する人間の対応は時として間が抜けて見えるものだが、まさにその時の私がいい例だった。勃起が収まったのを確かめて私は無言で席を立ち彼女に付いて行った。

「万年筆のお礼をさせていただけようと思つて」

彼女は喫茶店までの途中ただそれだけ言っただけだった。妄想の最中に突然といった感じで乱入してきた彼女に、まだ私の意識がついて行けなかった。

駅を通り越し、普段は学生があまり来ない高級喫茶店の奥に私達は向き合つて座った。私はこの店は初めてだったが、彼女はあの馴れた物腰から前に来たことがあるのだろう。薄暗い室内の明かりに眼が慣れてくると彼女の輪郭がはっきりとして来た。名前もお互いに知らなかったし、正面からまじまじと見据えるのも初めてだった。口紅を薄く塗っただけの化粧してない顔は、これから変身するであろう、女の可能性を秘めていた。

「英文科の澤田紀子です」
私もあわてて自己紹介した。「経済の紺野修です」

きっかけはともあれ、若い世代が打ち解け

るのに時間は掛からなかった。当初ぎこちな
い受け答えをしていたのはむしろ私の方で、
緊張が解けると表面的にはあたかも旧知の如
く話は弾んだ。故郷を語り、家族を語り、一
通りの背景を御互いに知り合うと、もう彼女は
は私にとって赤の他人といった存在ではなく
なっていた。

名前も知らなかった女性が短時間の内に身
近な存在になることが不思議だった。人の巡
り合いはそういったものだろうか、この壁を
難なく越せるのは一体何だろうか？ 図書館の
片隅によく居たのは判っていたし、万年筆を
借りに来たこともあった。同じ大学の学生と
いう共通点が壁を低くしていたこともあるだ
ろう。異性が引き合うという自然の摂理に従
っただけのことかもしれない。或いは彼女が
話し掛けてきたことには本当はたいした意味
は無いのかもしれない。私の思い過ごしで、
彼女にとっては単なる暇つぶしなのかもしれ
なかった。私はあらゆる可能性を詮索してい

た。彼女をどういう位置に置けばいいのか考
えあぐねていた。何かが始まるのだろうか？
私が彼女に対してどう思うかより、彼女が私
に対してどう思っているのかが一番の関心事
だった。異性には大いに興味があった。それ
だけに魅力的な女性が声を掛けてきたことで
私は舞い上がっていた。
考えてみればそれまで同年代の女性とま
もに付き合ったことが無かった。対応がぎこ
ちないのは自分でも良く判っていた。気の利
いた会話が出来た訳でもなかったが、それで
も私は高揚していた。時として上滑りな会話
が空ろに響き、自分が正常な精神状態でない
ことも自覚出来ていた。
私達の初めてのデートは私にとっては散々
だったが、彼女は極めて落ち着いて見えた。
「心ならずもこの大学に入学した」と言っ
た時私は自己嫌悪に陥った。ただ救いになっ
たのは彼女が「実は私もそうなんです」と答
えたことだった。言い訳がましい自分に我慢

がならなかったし、拘っているところに自分の弱さを見た思いがした。所詮、言わずもがなのことで、男としては口にすべきではなかったと後悔した。

おかしなことに彼女との会話の最中にも教授夫人との夜が時折思い出された。断片的に夫人の悲鳴に似た声や、特大の陰核が頭に浮かび、陰核を口に含んだ時の夫人の強烈な反応も浮かんできた。考えてみれば学校への電車の中でもこの光景は何度も出て来たし、図書館でも出て来た。目の前の彼女も同じ様に反応をするのかふと疑問に思った。そしてそんなことを考えている自分を恥じた。

満足のいかない初デートではあったがそれでも何かが始まる予感があった。

教授が学会から帰って来るまでの一週間は私にとって落ち着かない毎日だった。夜の快樂への期待は、ことが終わった瞬間から後悔に変わった。それでも私は欲望に任せて夫人の望むままに二度・三度と対応した。何回交わっても疲れることはなかった。むしろ二度目・三度目の持続時間は夫人を狂乱させ、互いにとことん満足するまで続けられた。今夜限りで止めようと誓っても、私は目の前の快樂をあきらめることが出来なかった。理性では到底コントロールすることは不可能だった。夫人も夜になると日頃の知的な振る舞いが消え、ものに憑かれたように私を求めてきた。これほどの危険を犯してまで行為にふけてってしまう自分に呆れた。叔父の恩師の奥さんと肉体関係を持てば、社会生活を営む上でバランスが崩れてしまうのは判りきっていた。それでも私は夜の来るのが待ちきれなかった。不思議なことに夫人には何の感情の乱れも見られなかった。少なくとも私にはそう

写っていた。

女性の昼と夜の落差はおぼちゃんとの体験で良く承知していたが、夫人もまた想像を絶する夜の顔を持っていた。清楚な貴婦人は夜になると食欲な雌に変身した。欲望を極めるためのあらゆる手段を駆使し、私にも与え、自分も享受した。際限の無い営みに私は恐怖に似た感覚を持つことさえあった。奥に秘めた夫人の性欲のすさまじさに圧倒された。営みが始まると夫人から羞恥心は一切無くなり、奔放に要求し、私にも尽くした。控えめでありながら燃え尽くしていたおぼちゃんとはタイプが違っていた。的確に要求し、又私にも的確に対応してくれた。おぼちゃんの時ほどの余韻は無かったものの、営みそのものは判り易く、爽快感さえ持てた。教授夫人でなければ私は心身共に充実し、もつと没頭出来たかもしれない。

目の前に極めて関心度の高いものが存在し、熱中しているのに私は又しても蟻地獄に

落ちた心境だった。意識の中には逃れたいという願望はあるものの、逃れることが出来なかった。決して自分にとって不快なことではないが「許されることなのか？」という疑問が私を不安にしていた。得難いものを手にした喜びは無く、単に肉体の快樂に身を任せているだけだった。何ものにも代え難い性の恍惚感には少々の後ろめたさではブレーキにはなり得なかった。やっではいけないとの反省が虚しく残るだけで、夫人を前にして瞬間の喜びに溺れていた。

人には語りたくないことが存在するし、認めたくないものも存在する。何を基準にするのかはそれぞれだろうが、私にとってはおぼちやんとのこと、教授夫人のこと、人には言えない出来事だった。許されない原罪を背負って刹那の快樂に身を任せる自分に、救いのない思いを深めることもあった。

現実からの逃避が、実はその原因となっている。目の先の欲望への没頭だった。

逃避のため否定するものに没頭するのは自己矛盾もはなはだしいが、性の欲望は自己破壊さえ招きかねないものだった。自分は間違ったことをしている、という意識は充分持っていたものの、止めることは出来なかった。私は正当化のためのありとあらゆる理屈を考えてみた。常人同士が同意の上であれば、問題はないのじゃないか、というのがいつも最後の言い訳になった。

本格的な夏が始まろうとしていた。暑さに弱い私は夏場には食欲が落ち、子供の頃から夏痩せをしていた。学生食堂、通称学食でカレ―なら口に入りそうだと半ば義務感で食べていた時、隣の席に女子学生が座って来た。昼食には遅い時間だったので席はたくさん空いているのに、と思いながら顔をあげると彼女の笑顔が目の前にあつた。喫茶店で話し込んで以来姿を見ていなかった。

「図書館でもこのところ会いませんでしたね」と話し掛けると「新聞の締め切りで忙しかったもので」と彼女はメニューを手に応えた。

「食事は終わっているので何か飲み物でも頼みますわ」と言い残し、チケットを買いに席を立った。相変わらず持ち歩いている大きな目のバッグからは新しいキャンパス新聞が数部はみ出していた。彼女は新聞部だったのだ。

午後の授業が休講になっていた私は、コー

ヒールを飲んでいる彼女を思い切って誘ってみた。「今から映画でも見に行きませんか？」
彼女は一瞬考えて「いいですよ」と応えた。一部貰った新聞には新安保条約の強行採決が一面に出ていた。私の大学では学生運動は禁止されていたが、新聞で取り上げる分には構わないのだろう。いずれにせよ政治には興味なかった。

「貴女の書いた記事はどれですか？」と聞いた私に、彼女は文芸欄のサマーセット・モームの特集記事を指差して、「これです」と恥じらいを含んだ笑みで答えた。

「本当はジョイスを取り上げたかったのですが、編集長が今風がいい、とモームを押し付けたんです」

確かにジェイムス・ジョイスでは一般学生にはあまり読んで貰えないだろう。

「後ほどじっくり読ませて下さい」と私は鞆にインクの匂いのする新聞をしまった。図書館での調べ物はこの記事の準備だったのか

もしれない。

若い時は独りよがりの発想と結論で唐突な行動を起こしがちだが、気になる女性の前では取り敢えず嫌われないようにするしかない。自分の本音の部分と、自分がよく思われようとする言動に差があるのも仕方がないことだろう。ただその使い分けに慣れてなくて自分がギクシヤクしていることがおかしかった。

後で分かった事だが彼女は午後の授業を欠席して私の誘いに乗ってきたのだった。まだお互いに見ていなかった「禁じられた遊び」をすんなり選び、消毒薬の匂いの強い場末の映画館で並んで鑑賞した。封切から何年も経っていたのと、平日のため観客は数える位だった。周囲に人が居ないと、広い映画館の一角でも自分達の閉ざされた空間が出来たみたいで落ち着けた。評判通りの名作で、ナルシス・イエペソのギターの旋律はデートのバックグラウンド・ミュージック

クとしては最高のお膳立てだった。

後半の場面で彼女の軽い嗚咽に気が付き、私は彼女の手を取った。強く握り返すと彼女の嗚咽は高まり、私に身を寄せ抱きついてきた。周囲に観客が居なかったための大胆な行動だったのだろうが、私も感動の極に達していて、私自身誰かに抱きしめて貰いたいような気分になっていた。切れ長の瞳に浮かんだ涙が暗い劇場の中で光っていた。私はほとんど発作的に彼女の顔を引き寄せ唇を合わせた。

「F I N」のエンディングマークが消えた後も私達はしばらく無言で座っていて、場内が明るくなってからも手は繋いだままだった。垣根が一挙に無くなった感じだった。

映画をきっかけに私達の会う頻度は多くなかった。新聞部の活動も二ヶ月に一度の出版が一段落すると暇が出来たらしく、授業が終わるとほぼ毎日のように図書館で待ち合わせ

た。

天気の日にはもっぱら新宿御苑や明治神宮と
いった広くて混まない所に出掛けた。話題は
多岐にわたり、特に共通の趣味である文学は
互いに熱く、作品に対する感想を自分なりの
解釈で語った。観念だけで生きてきた若者に
は他に知恵もなく、生活感のない話題に終始
していた。これも一度は通る若者の道程であ
ろう。

「西洋文学はある程度キリスト教への基本
的知識が無いと真に理解することは難しい」
と彼女が言った時、通り一遍の文学少女では
ないと認識を新たにした。彼女の言葉か、或
いは受け売りなのかは確かではなかったが、
少なくともデートでの話題は意図せずとも、
内容は別として知的レベルの高いところにとど
まっていたようだ。

日常性の無いカップルだった。

教授夫人との関係は続いていた。当初の罪悪感はその経過と共にやや薄れ、気分的にもいくらか楽になっていた。ただ教授の顔だけは見たくなかった。同じ屋根の下で同居するという現実は何れでも重圧になり、転居のいい口実をいつも考えていた。

夫人にそのことを話した時、夫人は「そんな必要はないわよ」ときっぱりとした強い口調で反対した。

午前中の休講で私が部屋に居る昼間や、教授が出張の夜、夫人はごく自然なことのようにならなってきた。当初避妊のことが気になり尋ねたが、夫人は「大丈夫よ」と言うだけだった。

「修ちゃんとは体が合うのね」という表現で夫人は自分の性的満足を表現した。性欲の処理は若い男性にとっては厄介なものだが、夫人の存在は私には好都合で、卑近な言い方をすれば便利であった。好感や憧れの感情は抱いていても恋愛の対象にはなり得

ないし、おぼちゃんの時と同じように別世界の出来事が同時進行していると認識するしかなかった。そして、それが決して長続きしないであろうことも理解していた。性欲は満たされても精神的に満たされるものはなかった。むしろ後ろめたい感情は常に心の刺として残り、いずれ終止符を打たねばと考えていた。

おぼちゃんとの時程舞い上がった感じは無かったが、それでも性的欲求が旺盛な時期の女性の存在は私の関心の重大な部分を占めていた。性的には満たされているものの、通常の精神状態ではなかった。あらゆることにバランスを欠き、心の平静さは無かった。

物心付いた頃から本は私にとって新しいことを教えてくれる友であり、師であった。娯楽でもあり、発見の場でもあった。落ち込んでいる時でも、少なくとも逃避できる処では

あった。

暑いせいなのか集中出来ず、活字は追っていてもぼんやりしていることが多々あった。本は読んでいるのに他のことを考え、本筋に戻るため何度も読み直さねばならなかった。これまでにはない経験だった。

自分の生い立ちやおぼちゃんとのこと、教授夫人との関係といったことが私の土台を揺すぶっていた。人間は、少なくとも私は自分の周りで起きたことから超越出来ないことを知らされた。本から得た知識で多少のことは解決出来ると思いついていたが、とんでもない間違いだと気付かされた。逃避は出来ても解決など望むべくもなかった。

夏休みを目の前にして、帰省を促す手紙が母から来た。その直後、叔母から部厚い大きな目の封筒が届いた。おばちゃんのお品の遺品の中に私宛の手紙が出てきたとのこと、封をしたまま同封してあった。病院が預かっている、おばちゃんの死後誰に渡していいのか判断がつかないものがまだいくつか残っていたらしい。

「黙って居なくなつてごめんなさい。貴方のことを考えたら自分なりに一番いい方法だと思つて決断しました。残念ながらこの病気は進行を止めるのが最大の療法だと医者から言われ、治らないことを悟りました。当初は錯乱状態になりましたが、貴方に心配掛けたくなかつたため地元を離れて療養することにしたのです。

今は小康状態を保っています。ただ白血球の働きが悪いため、抵抗力が落ちていそうです。細菌感染が良くないそうで、看護婦さ

んもマスクを掛けて病室に入って来ます。

私がまだ元気な内に修ちゃんに伝えておかねばと思います。あまり文章を書いた経験が無いので巧く表現出来るか分りませんが我慢して読んで下さい。

修ちゃんのお父さんと会ったのは私がまだ十八歳になったばかりで、彼はとても素敵な方でした。若かった私達はすぐに恋に落ち、私には何の性知識も無いまま結ばれました。

知り合って約ひと月後結婚を約束し、鹿児島に居る彼の両親にすぐにでも会う段取りだったのですが、そんな折あの人に突然召集令状が来て全ての計画が延期になりました。残り少ない日を惜しみつつ、彼が帰ってから新しい生活を始めようと約束してくれたのです。それでも私は心配でなりませんでした。

当時日本は中国と戦争をしていて、中国各地での勝利が新聞で連日のように伝えられています。日本軍には被害が少ないという報道でしたので彼は心配ないと慰めてくれました。

た。

戦場に行くということとは万が一という可能性もあります、とても怖くて口に出せませんでした。彼は努めて明るく振舞い、絶対無事で帰って来ると約束してくれました。私はその言葉を信じ、彼が故郷に帰る前日二人で神社にお参りに行ったのを昨日のことのように覚えていて、もしかしたら妊娠しているかもしれないと彼に伝えたら非常に喜んでくれました。 “子供のためにも絶対生きて帰る”と力強く抱いてくれ、私の涙を口で拭いてくれました。

「ごめんなさい、ここまで書いたら感情が昂ぶって続きが書けなくなりました。明日また書きます」

「見送りの日は涙を見せまいと決心して、一度故郷に帰る彼を横浜駅で送ったのが最後になりました。戦地に着任後手紙はすぐに二

度来しました。その頃は私の妊娠もはっきり分り、既に四ヶ月目に入っていました。最初の手紙に鹿兒島の陸軍は勇猛で、国のため立派に戦っていると書いてありました。自分は新兵の教育は既に受けていたがすぐに前線に出ることはなく、当分は見習いみたいなものと自嘲気味に説明がありました。最後の行に子供は順調に育っていますかと遠慮がちに触れていました。検閲のせいであまり私的なことが書けなかったのでしょう。

二度目の手紙には軍隊生活にも大分慣れてきたと書いてありました。後方でも狙撃があるので油断は出来ないが自分は大丈夫だと書いてありました。私がすぐに出した手紙には触れてなかったのでもまだその時は着いてなかったのでしょう。妊娠が確実で、順調に育っていると伝えたのですが。

三度目の手紙は彼から直接私に来ませんでしたが。その代わり戦友という方から彼の戦死の知らせが私宛に来ました。その中に私の写

真が死んだ彼の胸のポケット入っていたと書いてありました。彼が書き終えたばかりの未投函の手紙も同封してありました。あなたが出来たことを非常に喜んでいました。国の両親にも明日そのことを伝えるため手紙を書きますとありました。戦友の方の説明によればその翌日早朝の奇襲で亡くなったそうです。とても信じられなく、絶対間違いだと思いましたが。あんなに約束した彼が簡単に死ぬはずがないと思ったのです。戦友は苦しまずに死にました、と書いてくれたのですがそんなのは何の慰めにもなりません。戦争で人が死ぬのは珍しくない時代でしたが、彼が死んだことだけは絶対認めたくなかったのです。私にとって例え日本が戦争に負けても彼が無事に帰って来てくれさえすれば良かったのです。

死ぬことを何度も考えました。彼がいない人生は私にはとても耐えられなかったのです。明日こそはと決心しながらお腹で育って

いる赤ちゃんのことを考えたら、どうしても
実行出来ませんでした。そんな日が何日も続
きました。

友人のすすめで教会の牧師さんに相談した
ら絶対死んではいけませんと諭され、彼のた
めにも子供を生んで強く生きるべきですと説
教されました。

まだ、人間的にも未熟で、なかなか考えが
纏まりませんでした。が、牧師さんの話を聞い
て以来、彼の子供を生むことが私の心の支え
になりました。

当時結婚してない女が子供を産むのは大変
不道德なこととされていて、母子共に苦難の
道を歩むことは充分想像されました。それ
も私には何か生きるための理由が必要だった
のです。彼の子供を生むというのが私の生き
る理由の全てになり、そのおかげでふっ切れ
て迷いもなくなりました。

妊娠中期の安定期に入ったのをきっかけに
故郷に帰り、そこで貴方を生んだのです。両

親は何も言わず私を受け入れてくれました。
元気でとても可愛い赤ちゃんを六月に授かりました。その直後手紙をくれた戦友の方が除隊になり、私を訪ねて来られました。最初私の手紙にあった横浜の住所を訪ね、そこで私の実家を聞いて来られたそうです。偶然なことにその方の実家も私のところから一駅しか離れてなくて、その後何かと相談に乗って頂きました。

実家に帰った直後から生まれてくる赤ちゃんを里子に出す話が親や親戚の間で出ていましたが、私は絶対手放す気はありませんでした。あの人との子供を生きがいにしているのに手放すなんて考えられませんでした。まして生まれた赤ちゃんを見てからは、どんなことがあっても自分で育てる覚悟でした。戦友の方も私の心情を良く理解してくれ、物心共に援助することを申し出てくれました。彼の実家は資産家で戦時中にも関わらず珍しい食べ物をよく届けてくれました。赤ち

やんのために栄養をつけなさいと励ましてくれたのです。軍にも顔が利くとのこと。後で普通の手に入らないものを持ってきてくれました。将来のことを考えると不安になり、赤ちゃんと一緒に死のうかと思つたことも何度もありました。が彼の励ましで立ち直ることが出来ました。

彼は跡取りの一人息子だつたそうですが、三十を過ぎていゝるのに当時はまだ独身でした。ただ結婚を約束している人がいて、結納も軍隊に入る前交わしていたとのことでした。

戦友の方というのがおじちゃんだとすぐに推測出来た。ただおばちゃんの手紙には私の知りたい具体的なことが何も書かれていなかった。母が愛した人の名前も、年齢も職業も肝心なことが何も記されてなかった。

私を里子に出したのは私生児という烙印を私に押させたくなかつたための苦汁の選択だ

ったことが手紙の後半で細かく書いてあった。六月に生まれた私は十月に里子に出され、その月紺野家で新しく別の名前で誕生したことになっていた。

多分何日も掛けて書いたのだろう。前半の華麗な字は後半には乱れが出て、字に力が無くなっていた。それでも必死に私に伝えようというおばちゃんの気持ちが行間に窺えた。手紙を読んでいる間はおばちゃんと久しぶりに会ったような気になっていたが、読後はひどい寂寥感に陥っていた。そして底なしの虚脱感に襲われた。

私にとっては暑い夏になった。自分が背負っているものを精算しようとしても、とても叶わないことだった。理由を付けて故郷には帰らず、下宿と学校の図書館を無気力に行き来していた。活字を追っているだけだった。私には父と呼べる人も、母と呼べる人も存在してはいたが、実の両親はもはや生存していなかった。天涯孤独であることを認めるしかなかった。名前も顔も分らない父親に近づくことは永久に不可能になっていた。元々暑さに弱い私にはこの夏の暑さがとても不快に感じられ、やり場のない苛立ちがつづっていた。

教授夫妻は七月下旬から海外出張で出掛け、広い家を一人で占拠していた。今や夫妻から皮肉なことに家族の一員以上に受け入れられ、留守宅を完全に任されていた。庭の雑草を茂らせないことと、日が昇って暑くなる前に植木や花壇に水を撒くことを押し付けら

れた。朝寝坊した時は夕方水を撒いて帳尻を合わせた。

ひどく落ち込んで無気力な時、日課として自分の取りあえずやるべき義務があることが大いに救いになった。雑草取りと、水撒きは大げさに言えば落ち込んでいた時期の生きがいみたいなものだった。

ひどいショックの期間、夫人が居なくなつたこともあるのだろうが、私の性的欲望は異常に高まっていた。自分に何か不安なものがある時、人間は何かに逃避するものらしい。私の場合その対象は性の束の間の満足だった。夫人が教授に内緒で貸してくれたかなりどぎついエロ本や、写真に没頭し、日に何度も一人で排出していた。夫人は自分が居ない時、私の性の処理を考えて残していったものだった。

白人のカラー写真は人間が動物であることを猥雑に物語っていて、考え得るあらゆる行為を写し出していた。白黒のものは見たこと

があつたがカラーの写真は初めてだった。教授が海外で手に入れてきたと言っていた。射精の後の倦怠感はあることを否定的に考え、ますます落ちこんでいった。それでも物に憑かれたように射精を繰り返した。一瞬の絶頂感が私の逃げ場だった。無気力と退廃の極みで、性の満足が辛うじて私の生きている証だった。自己嫌悪の日々だった。

おばちゃんからの手紙を何度も読み返し、実父にたどり着くヒントを探そうとした。ありとあらゆる糸口を考えてみたが何も残ってなかった。おじちゃんの名前も、おじちゃんと父が所属していた部隊名も、戦死した場所も日時も、具体的なことは何も書かれていなかった。おばちゃんは意識して伏せたに違いなかった。私に事実を告げるのが精一杯で、それ以上のことは紺野家に遠慮して明かさなかつたのだろう。おばちゃんの控えめな性格を考えるとあり得ることだった。

澤田紀子とは映画の一件以来かなりの頻度で会っていた。家にも呼ばれたが気後れして行きそびれていた。教授夫人と関係を持ったまま彼女と親密な間柄になるのに後ろめたい思いもあった。

制服でのデートでは何となく世間の目を意識して手を組むようなことはしなかった。かなり知名度の高い制服が私達の行動を制約していた。私服の時は何のこだわりも無く腕を組んで歩いた。暗くて人気の無いところでは抱き合い口を合わせたこともあった。そんな時、私の勃起したものが彼女の下腹部に当たっていた。彼女は何も言わなかった。気がつかない筈は無かった。いつもそこまで、それ以上の進展は無かった。夫人との過度な性交渉が私の更なる欲望を抑えていたせいだろう。ただ、近い将来に彼女とは結ばれるだろうという漠とした予感があった。

おばちゃんからの手紙（遺書）が届いて以

来彼女と会っていなかった。何日も経ったように感じていたが最後に会ってからまだ十日も経っていなかった。手紙を読んだ後、真つ先に彼女に会って全てを話そうと思つたこともあつた。それをしなかつたのは彼女の同情を引くような方法で私の方を向かせるのが嫌だつたからだ。

出張の準備で忙しかつた教授夫人も私の変化に気がついていたようだが二人でゆっくり話す暇は無かつた。いずれにせよ私の出生の経緯に関しては誰にも話さないことに決めていた。

暑い夏の自虐的な日々の生活の中で、もし精神的な支えを誰かに求めるとすれば、身近に澤田紀子しか居なかつた。

素顔に口紅だけといった、ほとんど化粧して
ていない清楚な姿で現れた彼女を見て何か救
われる思いだった。もしかしたらこの女性を
真剣に愛しているのかも知れないと唐突に思
った。その時、不安定な精神状態で私の感情
が高ぶっていたことは自分でも良く承知して
いた。

彼女の顔を見ている内、無性に欲情してく
る自分を恥じたが、私の本心は彼女と裸で抱
き合い、生きている証を確かめるためだと自
分に言い聞かせ納得させた。独りよがりの発
想で彼女がどう受け止めてくれるかは考えて
もいなかった。何を言い出すのか、何を仕出
かすのか予想出来ない自分に不安を感じた。
私が呼び出して待ち合わせた学校の図書館
は学生の姿もほとんど無く静まりかえり、そ
こだけは真夏にも関わらず涼しかった。真夏
のキャンパス全体が運動部の学生がそれぞれ
の活動をやっている程度で、学生食堂も閉ま
っていた。

私は二人だけになれる場所に行きたかった。何かに縋りたかった私は彼女と会っていただけで癒される思いだった。

「身体の具合でも悪いの？ 痩せたし顔色も良くないわね」

確かに自分でも頬がこけ、生気の無くなつた姿は自覚していた。目だけが異常にぎらついた表情は彼女には健康を害したように写つたのだろう。食欲の無いまま食事もろくに取らず、睡眠不足と多淫が重なればそれも当然だった。

すぐに口を開かない私に「何か悩み事があるのね」と、彼女は断定的に言う。私の手をとって立ち上がった。キャンパス内で手を繋いだことはそれまで無かったが、私は無言のまま素直に従った。

彼女と最初に行った喫茶店で、店内はがら空きにも関わらず前と同じ奥の席に座った。

彼女を呼び出したものの、何も切り出せないでいた。私の出生に関するいかなることも

誰にも話すまいと決心した上で会っていたか
らには詳しいことは言えなかった。
彼女の姿を見ているだけで落ち着き、心が
安らいだ。
「君の顔を見たかった」と言っただけで私
は黙ってしまった。
どんなに深刻な表情をしていても内容が分
らなければ相手は対応の仕様がな。結局自
分の悩みは理解してもらえず、私の独り相撲
に終わるだけだ。深刻な悩みほど相手には理
解してもらえないという教訓が残った。同時
に自分は彼女に何を言いたいのかも良く分ら
なくなっていた。それでも彼女と一緒に居る
だけで満足だった。
何かを察した彼女は深く追求することもな
く、無為な時を付き合ってくれた。同じ歳の
彼女が年上に思えた。
人は何かしらの悩みや心配事を抱えている
ものだろうが、その時の私は世界中の苦悩を
一人で背負っているような心境だった。

おばちゃんが実の母だったこと。そのおばちゃんも男女の関係を持ったこと。父の存在は分ったものの、誰だかを知るすべが全く無くなっていたこと。それに教授夫人との肉体的関係。こういったことの渦中に居て、私は自分を落ち着かせるすべを失くしていた。運命として与えられたものであれ、自分で招いたものであれ、これらの全てが負の遺産となり、現実の世界での自分の方向性も失くしてしまっていた。

目の前の彼女に何をどう話せば分って貰えるのか見当がつかなかった。

暗い闇としか言いようのない過去は、自分で抱え込むしか解決方は無かった。強いて言えば封印して開き直ることが唯一の方法だろう。私の選択はまさに開き直りとししか説明がつかなかった。そう思って行動した訳ではなく結果としてそう言うしかなかった。

「僕の下宿に来ない？」

唐突な私の誘いに彼女は何の躊躇も無く同意した。

私に確たる考えがあつて誘つたのではなかつた。誰にも邪魔されず二人だけになりたかつた。

教授夫妻の家に下宿していることはすでに話してあつたが、二人が旅行中であることは言つてなかつた。

駅前の商店街で冷たい飲み物とサンドイッチ、それにビールを買い足し昼食の準備を整えた。食欲は無かつたが昼に近かつたし、少なくとも彼女は食べるだろうと考えることだつた。買い物をしていると日常の生活感が戻り、いくらか自分が当たり前になつてるのが実感出来た。

私の部屋のある二階に案内し、廊下でしばし待ってもらつた。蒸し暑い空気の入替えと片付けを済ませて声を掛けたが、彼女はずぐには部屋に入つて来なかつた。

廊下から「見事な庭ね」と私のほうへ振り向きながら彼女は同意を求めた。言われてみれば確かに広く立派な庭だった。家も新しくはないが洋風と和風の組み合わせだった本格的な建物だった。

「暑いけど庭に出てみる？」
私の誘いに彼女は子供っぽいしぐさで頷くと、白い靴下を脱ぎ始めた。

買って来た飲み物とサンドイッチを持って下に降り、二人とも裸足で芝生の庭に出た。飲む・食べるという日常の行為が私を現実に戻してくれた。入り込んだ暗い闇で自分の位置さえ分らないほど混乱し、落ち込んでいたのが、庭で彼女と冷たいものを飲むという単純なことで一時的とはいえ正常に戻れたようだった。

強い夏の日差し、裸足で出た芝生の庭、彼女と一緒に飲み、食べる、というこれらの何でもないことが私を癒してくれたようだ。貴重な体験になった。何でも理でしか考えよう

とせず、それが知性ある人間の対処法だと思
っていた自分が、この程度のことと心休まる
のが不思議だった。
ビールのせいもあってか、サンドイッチを
食べ終わった頃は気分も安らぎ、手抜きして
いた雑草とりを始めた。彼女も加わった。
上半身裸になり、身体を動かしているうち
に、自分の中で活力が漲るのを感じることに
出来た。
疲れると木陰に入り、彼女と語らった。直
射日光が強い分、木陰が涼しく感じられた。
その繰り返しで庭の雑草は見事に刈られ、
見違える様相になっていった。
彼女は作業が一段落した後「何かあった
の？」と私に問いかけてきたが、私は曖昧に
「君に会いたかっただけ」と応えた。そんな
筈でない事は彼女も良く承知していたのだろ
うがそれ以上追及してこなかった。
憑き物が落ちたような感じと、私は高揚し
ていた。単純と言えば正に単純で、今までの

悩みが何だったのだろうと自問する余裕さえ出てきた。人は暗くて重い悩みをいつまでも直視して生き続けることは出来ない。何らかの心の安定を保たねば、ひ弱な精神はもたなかったのだろう。

冷たいシャワーの水が日焼けして火照った身体に心地良かった。

今朝この下宿を出る時とは打って変わり、私はいつの間にか口笛を吹いていた。先に足を洗った彼女が部屋で待っていることを思うと、自然と動作は軽快になっていった。この十日間ばかりの落ち込みが自分でも不思議に感じた。落ち込んだことは事実だから、むしろこの変わり身の早さに我ながらあきれられる思いだった。多分この高揚感は一過性のものだろうが、それでも私には有難かった。女性の存在が私の悩みを取りあえず見事に解消してくれたようだった。シャワーに打たれた陰茎は力強く勃起していた。

夏の日はまだ高かったが、じりじりと焼けつくような鋭さは無くなっていた。上半身裸のまま浴室から出てきた私は今から起きるであらうことに期待し、彼女に話し掛ける言葉を捜していた。

結果として何の言葉も要らず、部屋で待っていた彼女と無言のまま抱き合い、貪るようなくちづけが始まった。

裸の上半身を彼女の手が撫で回した。彼女の目は堅く閉じられ、差し入れた私の舌を痛いほど吸い続けていた。極限まで勃起した陰茎を彼女の下半身に遠慮なく押し付けていたが、彼女の腰は逃げなかった。

長いくちづけで呼吸が苦しくなり、どちらからともなく離れた。お互いに顔を見合わせ、思わず笑みがこぼれてきた。

「私、初めて」と呟いた彼女が赤面した顔を伏せた。手を胸に当てたのは自分の鼓動を確かめているようだった。「こんなに」と言った彼女を抱き寄せ、私は自分の耳を彼女の

左の胸に当てた。全力疾走をした後のような早い鼓動が力強く響いてきた。

今までの何度か交わした口づけはほんの挨拶程度のものだったので、これ程興奮したことは無いという意味で「初めて」と彼女は呟いたのだらう。

「私もシャワー浴びてきていい？」と言う彼女を風呂場に案内し、新しいバスタオルを出して部屋に戻った。

彼女はこれから始まるであろうことを予期して身体を洗っているのだらうか。それとも単に汗臭くなった自分の身体を洗っているだけなのだらうか。

いずれにせよ何かが始まろうとしていた。それより自分の強い意志で始めようとしていたというのが正解だらう。何処まで行くのかは分らなかつた。ただ私を受け入れてくれているという確信はあつた。

長いシャワーのようだったが、実際は十分程度だった。待っている身には長く感じられ

ただけだった。

上半身裸のまま畳に寝そべっていた私の頭元に彼女は静かに座ってきた。手を伸ばすと素直に顔を寄せ、その口を私の口に合わせて来た。口を合わせたまま、彼女は足を伸ばし上半身を私の上に重ねてきた。彼女の鼓動が身体に伝わってきたが、前ほど早くはなかった。石鹸の香りが胸元や首筋から伝わってきた。

私の手は彼女の背中からお尻の方まで何度も往復し、一箇所に残まることはなかった。大人しくなっていた私の陰茎は、又勃起を始め、ズボンの中で窮屈に立ち上がっていた。お尻のところ降りていった私の手は、彼女の薄い夏物のフレアスカートをすこしずつ捲り上げ、直接彼女の下着にさわっていた。た。その手が下着のゴムを潜ろうとした時ちよつとした抵抗の動きが見えたが、彼女は拒まなかった。手首まで入り込んだ手は彼女のお尻の冷たさをその指先に感じた。同時に感

じた張りのある弾力はおばちゃんにも教授夫
人にもないものだった。

次第に彼女の呼吸が乱れ始め、鼓動の間隔
が短くなっていた。お尻全体を撫でていた
私の手は真ん中にとどまり、中指が中心の窪
みに下りていった時、彼女の手が私の手首を
強く押さえてきた。構わず先に進めた指先に
生暖かい湿気を感じた。彼女は私の手首をつ
かんだままだったが、拒絶はしなかった。呼
吸がさらに荒くなり、彼女の口が離れた。私
の胸に頭を預け、目は堅く閉じられていた。
さらに指を進めると、そこには縮れた陰毛の
感触とぬめった性器の手触りがあった。反射
的に股を閉じようとしたが、長くは続かなか
った。さらに指を進めると、彼女は閉じかけ
た股を開いてきた。
意を決した私は手を彼女の下着から抜き、
身体を起こした。彼女を上向けに寝かせたま
ま上から被いかぶさり、口を寄せていった。
同時に右手が彼女の下着に再び入っていつ

た。今度は性器の正面から入っていったが、彼女は又、私の手首を掴できた。柔らかな陰毛の感触と、ふっくらとした恥丘の膨らみの手先の先にあつた。先程より強く股を閉じてきたが、手首をつかんだ手には先程と同様、拒絶の意志は感じられなかった。少しづつ進む指先に、彼女の性器の全貌がだんだん明らかになってきた。中指が陰核を軽く撫でると、彼女の呼吸はさらに荒くなった。鼓動も先程より速くなり、すぼめた足の力も弱まってきた。た。さらに進んだ中指は彼女のぬめりとふっくらした唇のような感触を伝えてきた。静かに動き回る私の指に、彼女の呼吸は敏感に反応した。目は相変わらず閉じたままだが、眉毛には苦悩の表情が見てとれた。おばちゃんや夫人が性的興奮を感じている時に見せるあの表情だった。手首を掴でいる彼女の指にだんだんと力がこもってきた。私は余裕をもつて彼女を観察していた。男性経験が少ないか或

いは処女かもしれない彼女に、おぼちゃんの
教え通り最初の段階ではあくまで静かに、ゆ
っくりと指を動かし続けた。

指を中に入れようとした時「怖い」という
彼女の悲鳴に似た声があった。やっぱり彼女は
処女だったのだ。ただそのぬめりはおぼちゃ
んにも夫人にも負けていなかった。

彼女の呼吸はますます荒くなり、つかんだ
指の力はさらに増してきた。両足は真っ直ぐ
に伸ばされ、力が入ってくるのが分かった。呻
きに似た声が出始め、下半身に震えが出てき
た。顎が上を向き、口は少し開かれていた。
早めた指の動きに下半身が反応し、指に同調
した動きになってきた。

指の動きが緩やかになると彼女の反応も静
かになり、眉間の皺も緩んだ。緩急を織り交
ぜた私の指の動きに彼女は敏感に反応し、確
実に階段を登りつめていった。

何度と無く繰り返された波のうねりは段々
と高まり、突然「うっ」と短い声を発すると

同時に下半身の痙攣が始まった。足には力が入り、真っ直ぐに伸ばされ、私の手首をつかんだ彼女の指は痛いほど食い込んできた。間もなく長い絶頂感が彼女を襲っていた。顔は苦悩の表情で仰け反り、口は堅く閉じられたまま押し殺したうめき声は最大になった。指先に更なるぬめりが増え、彼女の下半身の痙攣は大きくなり、その後徐々に治まってきた。指の動きを静かにした時、彼女の上気した顔の仰け反りはもとに戻り、大きなため息が出て静かになった。私のくちづけに「恥ずかしい」と小さな声で呟き、顔を両手で覆った。抜き出した指は濡れて光り、ふやけて少し白くなっていた。濃厚な女性特有の香りが漂ってきた。

落ち込んでいた自分が、彼女のお陰で立ち直れたことに素直に感謝した。肉体の交わりは無くとも、彼女と秘密を共有したことに満足感を覚えていた。極めて冷静でいられたこ

とに我ながら驚き、それでも今日のこととはこれで良かったのだと自分に言い聞かせた。当然性的には自分の満足感は無かったのだが、不思議と充実感があった。取りあえず気分的に立ち直れたことの方が嬉しかった。何か意味のある会話を交わした訳でもなく、納得出来る特別なことがあった訳でもなかった。彼女との濃厚なくちづけと彼女の秘部を愛撫し、絶頂に導いただけのことだった。処女が男性に自分の性器を晒すのは、かなりの覚悟が無ければ出来ないだろうし、そこに信頼や愛情が無ければ男に身を任せることはしないだろう。まして絶頂まで導いて貰うにはかなりの覚悟が必要だった筈だ。自然の成り行きとはいえ、私に身を任せてくれたことに喜びを感じた。二人の垣根は全て取り去られ、新しい関係が始まったという実感があった。私は絶頂に達した彼女の肩を抱き、静かに慈しんだ。二人の間に言葉は無かった。

若者はいずれ大人の社会で自分の役目を見
つけなければ自立出来ない。大学時代はその
最終準備期間とも言えるだろう。ある者は高
校時代に、いや、それ以前に医者になると決
めその道を歩き始めている。ある者は技術者
への道を、ある者は教師への道をという具合
に早くから選択する者も居る。私自身経済学
部を選んだことで何となく将来が見えてはい
るが、それでもなおどういふ方面へ歩もうと
しているのか皆目見当がつかなかった。
子供の頃は偉人伝を読むたびに将来の道が
医者・政治家・科学者へと変化した。だが高
校を出る時は完全に目標が無くなっていた。
強いて言えば漠然と作家への憧れがあった
が、真面目に向き合うことは無かった。大学
も自分の選択では四年間教養学部で過ごした
かった。しかしそれさえも確固とした信念が
あった訳では無かった。
何か腹を据えて目標とする具体的な考えが
浮かんでこなかった。そういった煮え切らな

い自分に嫌気が差したが、それでも将来への道を選ぶ事も出来ず、決める事も出来なかった。誰のせいでもないが、漠然とした怒りと不満が胸の奥にはあった。早々と将来への選択が出来た若者に感心すると同時に、何処かで侮蔑していた。いずれにせよ少なくとも自分は功利的選択だけはしないと心に決めていた。優の数を増やして就職に有利な方法を選択する気も無かった。世間を知らない未熟者の独りよがりみたいなものだった。大学にまだ入ったばかりだし、切実な思いは何も無かった。その分、目的意識も充実感も無かった。関心の対象は自分であり、身近に居る女性であり、紀子であった。

久し振りに熟睡し、爽やかな目覚めが味わえた。考えてみればこのところ睡眠時間は短く、熟睡も出来てなかった。

前日の彼女との一件が私を変えてくれている。考えても解決出来ず重くのしかかっていた。聞が、少なくとも彼女のおかげで消えていた。雑草が刈られ見違えるように綺麗になった庭に水を撒いていて、私は自分が確実に変化している事を実感出来た。義務として何の感慨も無くやっている時と、自分の意志で積極的に参加する時の違いだろう。この違いは私にとって大きかった。独りの頭でどんなに弄くり回しても解決出来ないこともあり、それが一人の女性のおかげで取敢えず抱えた悩みが解消することがあると知って可笑しくなった。人間とは私に限らず、そんなものだろうと思うしかなかった。

電話が鳴ったのは丁度そんな感慨に耽っていた時だった。急いで玄関脇の電話に出ると

彼女の思いつめたような声が耳に入ってきた。

「今から行っていい」と願ってもない申し出だった。

大きなバッグを抱えて彼女は私の下宿にきた。

若い女性の思考過程など私に分る筈はなかった。結ばれたわけではないが、性的交歓が昨日あり、彼女は私の指で絶頂に達した事は事実としてあった。私の救いどころの無い悩みはただ彼女と性的遊戯をし、彼女が私に身を任せてくれた事で取敢えず収まっていた。そこには何の論理的な決着も無く、ただ私が次の関心事に気を取られ、現実から逃避していたに過ぎなかった。理屈では分っていた。でも、今の私にとって、それで充分だった。そんな時、彼女の方から私の下宿に来るといふのには何かがあるとは思っていた。意見を決して私の下宿に来た彼女は昨晚一睡もせず考えあぐねた末の行動だった。男の経験は無くとも性的な好奇心は旺盛で、何より性的に成熟する肉体を持って余していた。ほぼ毎日の如く繰り返す自慰を彼女は異常ではないかと悩んでいた。いずれ男性と結ばれ、自分の手ではなく男性の性器で絶頂を迎えることを知識としては知っており、それを望んで

いたが、それをいつ自分が迎えるのか、いつ自分が決心して男性を受け入れるのか彼女自身も分っていないかった。結婚という前提で身を任せる時代に生きる女性としては当然とも言えたが、彼女にはそれでは何か割り切れないうものがあつた。目の前に自分の好きになつた人がおり、その男性から性的愛撫を受け、自分では到達出来なかつたレベルの快感に導かれたことが彼女にとって次への決心の要因になつた。二人に将来どういう結果が待っていていようと、彼女は自分に取敢えず結論を出した。結婚を前提としなくても、今自分が思つたことを実行すると決めて私の下宿に来たのだつた。ただ漠然と生き、何となく流れに身を任せるのではなく、自分の意志で決めないと納得出来ないという女性だつた。

思いつめたように自分の心情を語る彼女を愛らしく思うと同時に、半端な気持ちでは彼女に太刀打ち出来ないと、少々怖い思いもあつた。

若い女性が自分の自慰体験を異性に自ら語るのは勇気の要ることだろうし、結ばれたいと申し出るのもさらに勇気の要ることだったろう。表面からは想像出来ない意志の強さに私は正直たじたじだった。

この迫力は大人しく見える彼女のどこから出て来たのだろうかと自問していた。

彼女の赤裸々に曝け出す本音を聞き、私の性的欲望はむしろ影を潜めていた。何かの儀式を行う前の厳かな準備の時間、という感じで私たちは真剣に話し込んでいた。お風呂を沸かし、待つ間に私は駅の近くの薬局へ急いだ。避妊のためのゴム製品を買いに出たのだが、私にとって初めての経験だった。使命感を帯びた心情だったせいにか、ためらいや羞恥心は全く無かった。思っていたよりはるかに安かったのが驚きだった。

全裸の彼女は見事なプロポーションをしていて、教授夫人とは違い若さに溢れていた。入浴そのものも儀式の一部といったとり上げ方をしていたせいか、それまで私の性的興奮はさほど高まっていなかった。しかし彼女の裸身を見たとたんに内から燃え上がるものがあつた。着衣からは想像出来ないふくよかな乳房や腰の括れ、尻の膨らみ、繊細な陰毛と微かに覗く割れ目等々は私を瞬時にして発情した雄に変えた。風呂場での長い口付けが始まった。小刻みに震える彼女は興奮の極にあり、ため息とも、吐息とも取れるうめき声を出し続けていた。

丹念に彼女の身体を洗い、秘部を開いて静かに清める頃、彼女の呼吸がさらに荒くなるのが聞き取れた。私の直立した陰茎の先からは透明な液体が絶え間なく、流れ出して来た。受身で身を任せる彼女はなす術も無く、既に恍惚とした表情を見せていた。感じ易い

体質なのだろう。身体を拭くのももどかし
く、私達は二階へと急いだ。

私は使命を帯びた儀式を執り行う神官とい
う役目と、極度に発情した雄の本能の行為を
同時に行おうとしていた。

不安ながらも身を任せる決心をした彼女の
内から湧き出る情欲への期待は、その清楚と
も言える性器に著しく現れていた。男性経験
は無くとも、とめどなく溢れる粘着性のある
透明な液体が彼女の性器を光らせていた。お
ばちゃんにも夫人にもその量は負けていなか
った。

彼女に言われて分った事だが、内側は少し
赤みが強く性器全体が腫れた感じがしてい
た。彼女の後の説明では、昨晚何度となく繰
り返した自慰のせいだった。男性の指で絶頂
に達した彼女は、その事を思い出しながら何
度も自分で達したということだった。その充
血が残っていて敏感になっていた。

私はその充血した性器に指は使わず、口で

の愛撫を続けた。処女の反応は経験ある女性と比べても遜色なかった。

性的に興奮の極みにある女性の反応は似たようなものだった。夫人のストレートな分かり易い手ごたえは、情緒の面で幾らか欠けるものがあったても、男にとっては欲望を高めるには充分だった。おぼちゃん言葉には出さず控えめな表現は、その身体の反応がそれ以上である事を伝えていた。

今、処女の彼女からは意味のある言葉は聞けず、内なる高まりがうめき声になって表れていた。風呂場から続いている下半身の微かな痙攣は、風邪で悪寒に襲われた時の震えそのものだった。

性の経験者としての立場から、私は確かに優位にあるのだろうが、極めて覚めた眼で観察していた。興奮はしていても舞い上がった精神状態ではなかった。何か、ネコ科の動物が仕留めた獲物をいたぶる姿に自分をなぞら

えていた。高まった性欲は充分認識していたが、恋する盲目的な男の自然な行為には到底思えなかった。常に自分を客観視する悪い癖が出ていた。ひたむきになりたいと願いながら、いつも何処かで覚めている自分に時として嫌悪感を憶えることがあった。つい昨日まで落ち込んでいた自分を、突き放した眼で見ていることにも気が付いていた。厭世観なのだろうか、或いは単なる性格なのか。救いの無い自分の立場になす術が無く、性の快楽に耽溺することで逃れようとしているのか。ただ単純に喜びに浸り、魅力ある女性を我がものにする、という幸せに没頭出来ればそれだけで充分の筈だ。いつも中途半端な自分が居た。

彼女は舌の愛撫で何度か高みに達していたが、絶頂には至ってなかった。共に汗まみれの身体で私達は長い間格闘していた。

バスタオルで彼女の汗を丁寧に拭き取り、

いよいよ儀式の瞬間がやってきた。ゴム製品を装着すると彼女の足を開き、その間に身を置いた。真っ直ぐ伸ばしていた足を少し立たせ、陰茎の先端を彼女の性器に進めた。夫人やおぼちゃんとの時は何の抵抗も無く進入出来たが、先端は行き場を見つけれず戸惑っていた。私は硬直した性器を手に持ち、彼女の入り口に固定した。先端が少し埋まる感じがあつたが、それより先には入れなかつた。彼女には明らかに苦痛の表情が出ていた。

「構わないから入れて」と眼をつぶつたまま彼女は催促した。私は意を決し、幾らか体重をかけて押し付けた。龟头部分に抵抗があり、彼女は逃れるように身体が動き布団の端まで頭が来てしまった。何度か同じことを繰り返した後、「無理しなくてもいいよ」と私が声を掛けると、彼女は先程より強い口調で「構わないから入れて」と今度は眼を開けて催促した。

肩に手を添えて彼女の上への動きを止め、

私は思い切って腰を押し付けた。亀頭部分がさらに締め付けられたと思った次の瞬間、陰茎全体が飲み込まれた。彼女の小さな悲鳴も同時に聞こえた。

彼女と結ばれた瞬間だった。

家にどう説明してきたのか判らないが、彼女は二泊して帰った。何度抱き合ったのだろうか、正確な回数は覚えていなかった。その度に少々の痛みを訴えるものの、最初の抵抗感は今全く無くなっていった。出血があったからには傷口が出来ている筈で、それが完治しなければ痛みは当然ある筈だった。それでも彼女は臆せず私を求めてきた。彼女が絶頂感を体験出来たのは口での愛撫の時と、指での外陰部を刺激した時だけだった。特に口での刺激には異常な高まりを見せ、長い間歓喜の波が続いた。

愛というのは便利な言葉だ。動物は発情

し、自然の摂理に従ってその期間互いに異性を求め、そして結ばれる。人間の場合、考えてみれば常に発情している。男女が結ばれるのを愛の最終の形として捉えているが、発情した男女が互いに求めているだけで、他の動物と何処に違いがあるのだろうか。

唯物的表現をすれば性ホルモンのなせる業で、子孫を絶やさない為の方便として強烈な快感を男女（雄・雌）に与えてあるに過ぎないのではないだろうか。私の皮肉な目は純粋な愛と称えるべき彼女との行為も、覚めた感覚で捉えていた。それにより、自分がどれだけ救われたかも良く判っていたのに。未熟で不安定な時期だったのか、未熟なりに本質を見抜いていたのか。

教授夫妻が帰ってくるまでの二週間は、二人にとってまさに狂乱の時間だった。

若者はただひたすら本能のまま求め合い、愛の営みに没頭した。かなりあったゴム製品

は使い尽くしてしまった。

表面上は何の変化も無かったものの、肉
体で結ばれた男女には、明らかに今までとは違
った感覚が生まれていた。究極のプライバシ
ーを共有した者に生じた連帯感と親近感とも
言えるだろう。

互いにどこまで理解したのか良く判ってい
なくても、私自身は共犯者として二人用の独
房に入ったようなものだった。この奇妙な感
覚はおばちゃんの時も、夫人との時も私の内
面に生じたものだった。しかし、常に何かし
ら後ろめたいものが残った。

夫人から誘いがあったのは帰国してから一週間程経った昼間だった。偶然にもその二日前に生理が始まった紀子と「生理休暇だね」と言っただけの関係を保っていた。夫人は医局恒例の夏の慰安旅行を、海外旅行の疲れを理由に断り、今朝教授だけを送り出したらしい。大学病院の診察があるため、教授は大学が夏休みでも帰国後毎日出勤していた。ただ帰る時間がいつもより不規則なため、夫人は用心してか私を昼間誘うことはなかった。お土産の高級な万年筆の御礼を改めて言いかけた私に、夫人は無言で抱きつき話をして、私の口を自分の口で塞いでくれた。馴れた男女の儀式が馴れた手順で濃厚に繰り広げられていった。

夫人の反応は紀子とは違っていて、知り尽くしている女性の的確な手順と、それぞれの段階を堪能する成熟した女性の食欲さがあった。飢えた渴きは一回の行為では収まらず、時差で夫人の身体が覚醒した夜に本番が待つ

ていた。

「待ちどろしかった」という夫人の囁き掛けは男として嬉しくない筈は無いが、心から喜べなかった。夫人の行為が濃密になれば為るほど醒めた感覚が生じていた。

相互愛撫での陰核の吸引に強弱を付けると夫人は全身の震えと、うめき声で反応を示したが、私自身はその行為に完全に没頭してはいなかった。夫人の満足を優先させ、望み通りに義務を果たしている性の誠実な職人といった心境になっていた。

紀子との行為より中身は遥かに充実し、欲望の処理と言う意味でも夫人相手の時が満足度も遥かに高かった。官能を互いに刺激し合い、心得たツボをなぞって進む一連の頂上への道は相手の吐息の具合で判断出来た。何度経験してもこの快楽は飽きるということが無かった。内なる欲望はすぐに回復し、際限無く続く幸福の絶頂感にも思えたが、必ずしも心の充実感は伴っていなかった。

肉体的には対応出来ても、私の中には微妙な変化が起きていた。

明け方下半身に圧迫感を覚え目覚めると、夫人は私の物を口にしていた。おばちゃんの時にも何度か経験があったが、寝ている時に夫人が啞えて来たのは初めてだった。その一途さと口に啞え、舌で丹念に愛撫する夫人に愛おしさを感じると同時に、ある種の恐怖感も湧いて来た。

数度にわたる行為で、昨晚絶頂感を何度も極めた筈の夫人は、それでもまだ満足していなかったのだろうか。あるいはそれが成熟した女性の性なのだろうか。

目覚めた私に「寝ていいのよ」と微笑みかけ夫人は、さらに舌の動きを活発にしてくれた。新たな格闘が早朝に又始まった。昨晚から数度にわたる射精で鈍くなっていた陰茎の感覚は行為の時間を持続させ、夫人の狂態をとことんまで引き出した。苦痛に歪む表情

で涙を流す夫人は、快樂よりむしろ苦惱を求めているとしか見えなかった。究極の悦樂は究極の苦痛と同じなのか、或いは表情が同じになるのか。時として発する「死ぬ」という絶叫は快樂なのか、苦痛なのか。おばちゃんの時も感じた成熟した女の性の奥深さを、改めて認識させられた。

「結婚した時、私は処女だったの」
シャワーを浴びてきた夫人は改まった口調で話し始めた。先程までの狂態が信じられなような落ち着いた知的な表情で、夫人は教授との馴初めと二人の結婚生活を静かに語りだした。

夫人が教授との結婚に積極的だったことは前にも聞いていたが、今度はもっと内面と教授との夫婦としての問題に深く入り込んだ話で、私は聞かない方が良かったと後で正直な感想を持った。色の浅黒い精悍で知的な教授の容貌は、ひ弱なインテリとは違い確かに若

い娘の憧れの的には充分なり得たと想像出来る。

夫人の話によれば、結婚当初の溢れんばかりの教授の精力は夫人をすぐに虜にし、夫人の女の部分を急速に開花させたそうだ。幸せな結婚生活はそのまま続くかに思われたが、教授には子種が無いことがやがて判った。教授は子供の頃お多福風邪を患っていたので、薄々予感があったらしいが、事実と直面することを避けていたそうだ。それに教授は五十代に入って判明した糖尿病の影響か、勃起力もこの数年弱まっているらしかった。子供も持てず又、女盛りを迎えていた夫人には全てが物足りなくて悩んでいたという。夫人の外見からは何の悩みも感じられなかったが、人にはそれぞれの問題があることが判った。

答えの出ない問題ほど面倒なことは無いと自分でも良く自覚していたので、私は自分のことになぞらえ黙って聞くだけにした。

他人から見れば、これ以上無いような組み

合わせで、幸せそのものに思われた教授夫妻にも、人に言えぬ悩みが存在していた。この場合、女盛りの夫人の方がより切実な悩みを抱えていたことにもなる。

夫人の積極的な私への働きかけは、この話を聞いて納得出来た。性の欲望を抱えて困っていたのはむしろ夫人の方で、近くに存在した若い男性は、格好のターゲットだったとも言えよう。

夫人の打ち明け話で、私は幾らか気分的に楽になった。同時に外に出せないことで人は一番悩んでいることに気が付いた。多くの問題は知恵ある人に相談し、解決の方法を探ることは可能だが、大っぴらに言えぬことこそ問題の根が深いのだろう。特に自分の性欲に関する悩みは女性にとって最も口にし辛く、厄介なことではないだろうか。

夫人に同情することで私の罪悪感随分薄められた。ただ、今の自分には紀子という女性が恋愛の対象として存在し、普通で感覚で

捉えれば夫人との性的交渉は当然断つべきであつた。

同時に複数の女性と関係を持つことはそんなに珍しいことではないだろう。むしろそうといった例は世間に幾らでもあり、多くの既婚男性でさえ配偶者に隠れてそのチャンスを狙っているのではないのだろうか。特に独身男性の場合、何ら制約が無いため実態は気儘に複数の女性と関係を持つこともあり得ることだ。しかし本人の満足度で判断すれば、それは数が多いから良いとも言えない面もあるだろう。私の場合正にそれだった。自然の成り行きとはいえ、同時に二人の女性と関係を持つのは決して幸せなことではなかった。何かしら後ろめたい感情が常に先立ち、釈然としなかつた。そして自分の中でいつも序列を付けて対象の女性を見ていることに気が付いていた。

「女性でも身体の芯が熱を持ったような感

覚に襲われ、正に子宮から性器全体にざわめきを感じることもあるのよ。身体中が敏感になり、無性に男が欲しくなるのー

夫人の告白はあけすけで情緒は無かったものの、生々しい切実さは伝わって来た。

「自分で慰めても何かしら物足りなくて、何度も繰り返すことがあるけど、その後は空しさが残るだけー

「独身の時はそれで満足していたのに、男を知ってからだけでは駄目ー

夫人は独身時代と結婚後の自慰体験を生々しく語り、その違いを説明していた。夫人が異常な体質なのか、健康な女性であれば当たり前なのかの判断はその時の私には出来なかった。夫人の場合、生理前の一週間は特にその兆候が顕著であるらしい。

性にまつわる個人的な体験は、通常隠されているからこそ秘め事として明け透けに話題にされることはない。他人がどういう体験を

しているのか誰しも興味があるが、通常では知る術はない。他人の行為そのものもまず普段の状況では目にすることもない。究極のプライバシーとして男女の営みは他人の目から遮断されている。だからこそ人は知りたがり、詮索するのだろう。特に女性経験の無い若い男には性にまつわるあらゆることが好奇の対象となり、この衝動は正に発情としか形容出来ないだろう。女性を知るまでのあらゆる妄想は、その大部分が的外れだとしても後に残された悦楽への準備期間だったとも言える。

或いは女性にも同じことが言えるのかもしれない。何が待っているのか男も女も既に知っていて、それは本人の理性の部分で判断することではないようだ。遺伝子に組み込まれた動物の本能と言うのが一番適切な説明かも知れない。色々と社会的制約があったとしても必ず何れ辿り着ける到達点なのだろう。情報を活字で得られる現代人は書物を通して知

ることが可能だが、人類の歴史で見れば活字
や絵が、或いは写真が本として出て来たのは
つい最近にしか過ぎない。しかし、人類は確
実に継承して来た。文字の無い時代も、本の
無い時代も。考えてみれば猿も犬も猫も、
粛々と継承し、種が絶えたことはない。赤ち
ゃんが生後すぐに母乳を飲む如く、男女の営
みは本能として生まれつき備わっていて、時
期が来れば結ばれることを我々は意識しない
までも知っているのだ。誰もが大っぴらに語
り、公開されなくとも、私達は男女の区別無
くゴールへの道を確実に知っている。

夫人の告白を聞いてからの私には、罪悪感
の大部分が消えていった。それでも紀子との
同時進行の肉体関係は何かしら心に引っかか
るものが残っていた。

「修さん電話よ」

夫人の声に反応しながら、彼女からだど確信した。女性からの電話を意識してか、夫人は久し振りに私に「修さん」と呼びかけた。両親と叔母以外には彼女にしか電話番号を教えてなかった。

「今から家に泊りに来られる？」
私は瞬間的に夫人に対する言い訳を考えていた。

「判った」と待ち合わせの駅と時間を確認して電話を切った。

「帰郷しなかった田舎の同期生が集まって飲み会を開くらしいのですが、若しかしたら泊まってきます」と、よどみない嘘の口実が出てきた。

夫人は微笑みながら見送ってくれたが、気のせいかその微笑に何か引つかかるものを感じた。嘘について彼女に会いに出掛ける引け目がそう感じさせたのかもしれない。

両親が田舎の法事に泊りがけで出掛けた為
彼女は私を誘ったのだった。夫人が帰国以来
彼女との身体の関係は絶っていた。手軽に会
える場所が無く、何か手を打たねばと思つて
いた矢先でもあった。
待ち合わせの駅に彼女は既に来ていて、迷
うことなく会うことが出来た。駅前の商店街
を抜けると静かな住宅街がすぐ目の前に開け
て来た。高台にある住宅地は一軒の単位が広
く、高級な雰囲気を漂わせていた。
家に入るなり「会いたかった」と言つて抱
きついてきた彼女がいじらしく、彼女を本気
で愛している自分を心から認識出来た。厄介
なものゝを沢山背負っているという負い目がな
かなか素直に彼女に没頭することが出来なか
つたが、気がついて見ると彼女は私にとって
は一番大事な人になっていた。
整頓された彼女の部屋は余計な装飾が一切
無く、男の子の部屋と言われても通用しただ
ろう。本棚には英文の原書が何冊も並んでい

て定番の「足長おじさん」・「さようならチップス先生」、「二都物語」といった作品が垣間見えた。モームの作品も「人間の絆」を始め、何冊かあった。それに「カンターベリ―物語―もあった。ただ殆どはハードカバーで、私が買うようなペーパーブック（廉価本）ではなかった。

「さすが英文科だね。これだけ有れば新しい教材は要らないね」と軽口を叩く私に、「全部は読んでないのよ」と微笑んで、「父の趣味でもあるの」と答えた。

「父は私を田舎の法事に連れて行きたかったようだけど、新聞部の行事と原書読破の宿題を口実に断ったの」

親離れはこうやって始まり、愛娘は自分の一番関心のあることに向かって行く。好きな男の出来た娘の通過儀式とも言えよう。私は彼女の父親に何か申し訳ない気持ちになった。

独立した彼女の部屋は玄関から入ってすぐ

左にあり、トイレや風呂も廊下を通るだけで
用が済ませた。何故だか両親の生活感のある
場所は避けたかった。多分私の中に後ろめた
い感覚が残っていたせいだろう。彼女の部屋
に無断で泊まるのは今日だけで、今度来る時
はちゃんと親の居る時に、そして少なくとも
挨拶して堂々と家に上がりたかった。神経質
な気の小さい男の配慮とも取れるし、思慮あ
る若い男の分別とも取れる。どう取るかは観
る人の感性だろう。自分で決め付けることは
なかった。

日が暮れてから近所の中華料理屋に行き早
めの夕食を取った帰り、彼女を待たせて私は
一人で薬局を訪ねた。今晚必要になるものを
仕入れるためだった。
時として見せる彼女の大胆な行動は私の浮
ついた気持ちをいつも引き締めていた。表面
的には大人しく見える、彼女の持つ秘められ
た存在感は脅威に感じるものが何度もあつ

た。中途半端な気持ちでは彼女に対応出来ず、私なりの覚悟を迫られていたとも言える。

久し振りの若者の交歓は疲れを知らず、明け方まで延々と繰り返された。女性としての開発が始まったばかりの彼女は、挿入後の営みである程度の高みに達することは出来ても、頂点にはまだ手が届かなかつた。何かの予感はあるらしく、性行為そのものに関して、はむしろ積極的で、最後の指や口でのとどめに深い絶頂感を身体全体で表現していた。

「私もやってみたい」と私の陰茎に口を寄せてきたのは彼女が口での絶頂から暫く経つて平静に戻った後だった。

それまで彼女は何度か高みに導かれ、その度にぐったりとした様子を示していたが、すでに回復していた。相互愛撫でもぎこちない手つきで私の陰茎に触れている彼女が、大胆にも口を使うことを自ら申し出て来た。やが

て時が経てば自然と行うようになると考えて
いてそれまで彼女に要求することは無かつ
た。彼女の早すぎる提案はむしろ私にとって
大歓迎だった。

「貴方にやって貰ってあんなに気持ちが良い
くなるのだから、貴方にも同じことをやって
あげたいの」

「洗って来ようか？」という私の問いには
答えず静かに私のものを口に含んできた。何
度か射精した後にもかかわらず、たちまち反
応して彼女の口の中で硬直してきた。目を
ぶり熱心に舌で亀頭部分を嘗め回す彼女がい
とおしく、上手・下手の尺度を越えて私に感
激と興奮を与えてくれた。

控えめなのは慣れぬせいだろうが、逆にそ
れが好ましい刺激となり、私も体位を変えて
彼女のものに口を寄せていった。二人にとつ
て始めての口による相互愛撫となった。

私達は長いこと高みに漂い、悦楽の時間を
過ごした。彼女に反応の変化が現れ、呼吸も

荒くなってきた頃、私は不覚にも彼女の口の中
中で絶頂を迎えた。それまでの射精にも負けぬ
ぬ感覚が襲って来た。

快樂を重ねた後の快い倦怠感で明かりを点
けたまま二人とも眠ってしまったらしい。目
が覚めた時一瞬どこで寝ているのか判らな
かったが、彼女の寝姿を見て現実に戻った。煙
草に火をつけ眠気が抜けた頃、彼女も気配を
察してか目を覚ました。腫れぼったい目が彼
女の睡眠不足を物語っていた。
「冷たいものでも持ってくる」と彼女は起
き上がり、部屋を出て行った。枕もとの目覚
まし時計は四時になろうとしていた。

人は日常の中で自然に行動の選択肢を決め
ている。正確に言えば優先順位だが、時とし
てどんなに忙しくても、他の予定をキャンセ
ルして選ぶことがある。今の私にとって彼女
と会うことが全てに優先した。彼女に呼ばれ
て一晩を共に過ごそうとしている時、まさに

それを実感しそんな自分の気持ちを誰かに伝えたかった。

短い間に燃え上がった私達の感情は、多分愛という言葉で説明され、他から見ると二人は恋愛関係と言うのかも。しかし私の中にはそれだけで説明出来ないものが残っていた。

夫人と今でも続いている肉体関係はどう受け止めればいいのか。紀子との恋愛感情が育まれた時、夫人との関係は当然解消するべきではないのか。今、優先順位第一番に位置している紀子は絶対的存在ではないのか。そもそも、愛と肉体関係はどうあるべきなのか。

簡単には結論が出ないまま、私は現実の流れに怠惰に身を任せていたとしか言いようが無かった。何か自分がだらしのない男に見え、紀子に対しても済まないと思う気持ちが生じていた。

何か薬の匂いがする濃い茶色の液体は、飲むと炭酸のはじける感じが口いっぱいに広がり、眠気が完全に醒めてしまった。
「コーラーって言うのよ」彼女は笑いながら説明してくれた。彼女の父親が米軍関係者と親しくて、その彼がケースで常時持ってきてくれるそうだが、私にとっては初めての飲み物だった。後味は極めて良かった。

男女の間でもその組み合わせで二人の周りに流れる空気は違ってくる。まだ男を完全に知らない紀子は、昨晚からの狂ったような営みとは全く別の世界に存在する少女のようだった。夫人と同じ時間を過ごしていればもつと違った空気が今流れている筈だった。夫人の身体中から発散する女の余韻や雰囲気は紀子にはまだ無かった。熟する前の青い果実と、いうのが一番適切な表現かもしれない。清楚な佇まいは、どう考えても先程まで肉体の癖を追及していた発情期の女性とは一致しな

かった。

睡眠時間が足りない時は妙に神経が高ぶるものだが、その時の二人はまさに高ぶったままで会話に熱中していた。

先を考えなくとも今ある現実で満足するのもし生き方だろうが、紀子と男女の関係になつた今、何故だか充足感は無かった。この先二人はどうなるのだろうかといったことにも希望的考えを持つには至らなかった。

お婆ちゃんとの別れや複雑な自分の生立ちを顧みると、幸せな時間は長く続かないという獺とした負の確信と不安感が私の中にあつた。悲観的に考えるのは若しかしたら人生経験の浅い若者の未来に対する恐れかもしれない。表面は明るく紀子と会話していても、常に何かしら私を不安にするものが私の内に存在していた。

「可愛がってくれている叔母の家に泊まつた時、叔母たちの性行為を目撃したことがあ

るの」

紀子は自らの体験を話し始めた。

「大学の入学祝いに呼ばれた夜のことだけ
ど、深夜トイレに立った時、偶然少し空いて
いた寢室の扉越しに叔母が口で叔父のものを
啜えているのが見えたの」

見えたのは一瞬のことだったがそこで何が
行われていたか、彼女はすぐに理解したとい
う。男女の間にそういう行為があることは知
っていたが、まさかと言うのがそれまでの彼
女の認識だったそうだ。

その時、不思議と嫌悪感はなく、ただただ
驚き、興奮したらしい。彼女の叔母はかなり
の美人で、叔父も紀子から見て魅力的な人だ
ったので一種の憧れの目で叔母夫婦を見てい
たそうだ。その夜長く続いた叔母の低いうめ
き声に触発されて、彼女も自分で何度も慰め
たという。

「知識としては知っていたけど、やっぱり
現実に直面するとショックだったわ」

翌朝何事も無かったかの様に振舞っている
叔母夫婦を見て、結婚生活では別に異常なこ
とではないのだと妙に納得したそうだ。印象
に残ったのはあの叔母の消え入るような長く
続いたうめき声で、今思い出しても興奮する
という。

似たような体験をお互いにしていたことにな
る。その体験が彼女を目覚めさせ、男女の
営みにより関心を持つことになった。彼女は
自分も一度は叔母のように男のものを口にし
てみたいと願っていた。それが先程の行為に
結びついていたので。

「横顔の綺麗な叔母は立ち振る舞いにも品
があり、そういうことには全く縁の無い女性
だと勝手に思い込んでいたけど、現実には叔父
のもの啜え、喘ぎ声を出し続けていたので安
心したの」

彼女の原体験は男女の行為をむしろ肯定的
に捉える要因になっていた。自分の自慰体験
が認められた気になっての安心という感情だ

つたらしい。

女になる準備は内からも外からも進んでい
た。成熟した大人の営みを、ふとしたきっか
けで目撃し彼女はよりそこへ近づこうとして
いたのだ。若い生娘に有り勝ちな潔癖感から
くる拒絶ではなく、大好きな叔母を見本とし
て女になる道を自ら選んでいたので。彼女の
積極的な取組みは内なるものの生理的欲求に
正直に反応していただけであろう。

彼女を好色と決め付けるのはあまりに単純
な見方ではなからうか。清純さの残る容姿に
好色と表現されるものは何も見出せなかった。
彼女は真摯に性の快楽に立ち向かい、求道者
のような姿勢で対峙していた。下半身の問題
を曖昧にせず、自分の納得の行く方法で模索
していた。
照れも無く気負いもなく、肅々とかつ食欲
に答えを求めていた。

紀子は性に目覚めた自分に興味を持ち、そ

ここに女性としての普遍的価値や法則を求めようとしていた。自然に手が自分の陰部に導かれ、性器を撫で回している内に気持ちが良いくなり、何時しか強烈な快感に変わって来た経験が彼女の自慰の始まりだった。

今となればきつかけとなったことや、初めての体験が何時だったかは定かではないらしいが、中学以来ほぼ毎日、日課の如く自慰を繰り返していると言う。しかし親にも友人にも打ち明けることが出来ず、又打ち明けることではないと思ったそうだ。陰部を毎晩まさぐる自分が、異常ではないかと悩んだ時期もあったという。しかし得られる快樂の誘惑には勝てず、自分独りの秘め事として繰り返していた。

内から湧き出るものを思春期の発情と捉えるのは或いは正しい判断かもしれない。ただそれだけでは済まされないことが彼女にはあった。性に関する書物は当時多くはなかったが、父親の持っている海外の文献では女性の

自慰に関する記述が幾つかあった。そこでは否定的な意見は無く、ただ事実と聞き取り調査の結果が数字として客観的に出ていただけだった。自分だけの異常な行為ではないことが分かっただけでも安心したそうだ。動物の雌としての人間が行うからにはそこに何らかの必然があるに違いないと結論付け、むしろ積極的に立ち向かうと彼女は決めていた。人間に与えられた喜びを否定することはないし、まして強烈な快感を伴う行為にはむしろ、より積極的に取り組むべきだというのが彼女の考えだった。ただ、自分だけで出来ることには限界があり、最終的に男というパートナーが真の快樂の為には必要なのも理解していた。

彼女との一夜は女について知り得ることが多かった。ひたむきに説明する紀子を受け入れてはいるが、私の本音はもつと氣樂に構えていて欲しいというものだった。心身共に疲れた一夜だった。

時は過ぎてみれば早く感じるものだ。一日の営みが積み重なって未来へと向うのだが確とした目標が必ずしもある訳ではない。夫人のことも紀子のことも、はっきりとした未来図は見えないままに時だけが流れて行った。

夫人はこのところの私の素振りから女が出来たのを察しているようだった。啞えた私の性器に女の匂いがすると指摘したが、私は曖昧に笑って誤魔化した。

同時に二人の女性と関係を持つというのは肉体的のみならず精神的にも疲れるというのが私の率直な実感だった。夫人との間も当初の感激や興奮は薄れ、互いに性の満足を分かち合うだけの新鮮味の無い関係になっていた。今となっては私の存在はむしろ夫人にとって必要な性のパートナーと言えよう。感情の導入も必要が無く、ひたすら性の満足を互いに求めた。二人の仲は許されないことだと

の認識も薄れ、言わば惰性で続いていたとい
うのが正確かもしれない。
私の中に社会のルールを破っているという
感情以外に、少しずつ夫人との行為に嫌悪に
近いものが生まれていた。ことが終わった後
の倦怠感がどうしても夫人との関係を肯定的
に捉えることが出来なくなっていた。男は射
精した後は虚脱感を覚え、女のように所謂後
技を必要としない。終わった後、何時までも
身体の接触を続ける夫人に最近は疎ましささ
え覚えるようになっていた。当初は彼女のこ
ういった余韻を好ましく思ったものだが私の
中の何かが変わってしまったのだろう。そして
何より同じ屋根の下の夫婦に自分が深く関わ
っているのが嫌だった。他の場所でなら夫人
を抱くことにこれほどの心理的抵抗は無くて
済んだのかもしれない。
身勝手なものであることは良く認識してい
たが、現状から逃げ出したいというのが正直
な感想だった。肉体だけの関係になった時、

それでも男女は生理的に互いを必要とする必然からすぐに別れることはしないだろう。若しかしたら殆どの夫婦はそうかもしれないと思ったりした。男女を結びつけるものは何だろうという基本的疑問は残ったままだった。そこにより精神的なものを求めたがるが、本当は何だろうという疑問だった。

「今日は寝かせないわよ」と言う夫人の言葉に最近はおぞましさを感じるようになっていた。当初は男として張り切る様な女性からの囁きかけに今では嫌悪の感情が生まれていた。性のパートナーとしての夫人は申し分ない女性だった。容貌といい、スタイルといい正に一級品の女性だった。感じやすい身体は男のやる気を起こさせ、性的衝動と興奮を掻き立ててくれた。

手にしたものが如何に高価であっても、自分の趣味に合わなくなれば価値は自ずと下がっていく。貴重なものを手にしていても、そ

の価値が判らなければまた関心は薄れていくのだろう。得がたい女性であるという認識には全く変わりが無いのだが、私の関心は薄れつつあった。それが当時の私の正直な感情であつた。

男として得がたい魅力ある女性を手にした喜びは当然あつたのだが、新しい女性の出現と、性的に充分満足している環境では二人を同時進行で支えていくのは精神的に疲れるものがあつた。贅沢な悩みだつたとも言える。

人は今日あるものは明日もあると思ひ勝ちだが、人生では突然予告無しで変化することが多々ある。今日の命が明日もあれば人は永遠に生き続けることになる。人間の感情は同じ状態で続くことは希で、新鮮な喜びも時と共に色あせてくる。特に男と女の関係では出会いと別れは常に付き纏う。きっかけは大して意味が無い。要は飽きであり、倦怠であるう。

傍から見れば理解出来ないことが有っても
当事者には納得いくものがある。家庭や子供
を持って社会的責任が生じた夫婦の場合、我
慢という知恵がお互いに働くことがあるだろ
うが、何の制約もない男女では好きだという
感情が薄れた時、別れは簡単にやってくる。
学生という身分は保護されていて、自立の
為の準備期間とは言えるが、何ら社会的責任
を負っていない。当人は一人前のつもりで
も、生きることの根源である生活上の糧は全
て親から支給されている。考えることが先鋭
化し、観念的なのはそこに原因がある。勝手
気ままに生きても当事者はあまりそれを意識
しないでいることが多いだろう。未熟と言わ
れる所以だろうが、正に私の場合未熟そのも
のだったと言える。
責任を取れない問題に平気で立ち入り、自
分が重大なことに関わっているという意識は
全く持ってなかった。世の中のルールを破つ
ているという贖罪意識に辛うじて未熟者の反

省があつた。

紀子の存在が大きくなるにつれ同じ屋根の下の夫人を疎ましく思い始め、快楽に身を任せていた自分に嫌悪感を持ったのは、必ずしも整然とした自己規制が基になつたのではなく、単に身勝手な男のエゴが成せる結果だつたのかもしれない。正に一人の女を愛し始めた男の究極のエゴが出した結論に過ぎなかつたのだろう。私は理由にならない理由を挙げ、下宿を移つた。

夫人のところから離れ、紀子の住まいの浴線に格好な居場所を見つけた。

暑かつた夏は終わり、朝晩は肌寒くなつた秋口の頃だつた。

新しい下宿はこじんまりした一軒家だったが、貸し主が転勤で戻ってくる時、明け渡すのが絶対の条件だった。それでもそこを選んだ理由は紀子と何時でも身体の交歓出来ることが頭にあつたからだ。願っても無い物件に恵まれたと二人で喜んだ。有り難いことに電話も付いてそのまま利用出来た。何時でも落ち着いて交歓出来る場所の確保は確かに便利ではあつた。特に女の喜びを感じ始めていた紀子にとって、急速に学べる時期となつた。まるで新婚の生活が始まつたかのような感じだつた。紀子が泊まるのは数少なくなつても、望む時には何時でも抱き合えた。夫人とはその後も関係が続いていた。主軸を紀子に移したことが私の精神的負担を軽くしていた。

女の存在を薄々感じていた夫人も、定期的を訪ねて来て私を求めた。何となく調和の取れた関係になつていた。女の生理を理解した私は夫人の求めが切実なものであることを認

め、来た時はとことん奉仕した。

大人の配慮か抑制か分からないが、肉体の満足を得られれば夫人はそれ以上のことは求めなかった。必ず前日には電話があり、予定がはっきりしていたことも私にとって是有難かった。それに同じ屋根の下に住んでいないのが何よりだった。

「修ちゃんのもの終わっても固いままでしよう。それがとてもいいのよ」

夫人は過去にもそう指摘したことがある。言われてみれば射精後も硬度は落ちなかった。男として当然の生理現象だと思っていたのだが必ずしもそうでないことが夫人の説明で分かった。そう言えばおばちゃんも「修ちゃんも頼もしい」と、ことが終わった後何度か言ったことがあった。

私の二人の女性に対する感情は自分なりにバランスが取れていたとしても、かなり歪なものであった。紀子に対しては正に若者の恋人に対する一途なものがあつたのだろう。一方、夫人に対してはいつの間にか精神的には何か優位な立場で接していた。同じ様に肉体を交えていても、夫人が他の男と何をしようかと許せるが、紀子は絶対自分だけのものであつて欲しかつた。独占したくなるのが男のエゴなのか愛情なのか、自然に湧きあがつた感情に不思議な思いがした。これまでにはない女性に対する感情だつた。

紀子と肉体関係が始まって三ヶ月経とうとしていたが、彼女の反応がこのところ日毎に高まっているのを感じていた。そしてある日突然に紀子は本当の女になつた。紀子が下宿に來た時は彼女が生理の期間でない限り私達は何度も抱き合つた。生理の時には彼女は一方的に口で奉仕してくれること

もあつた。

ある土曜日、風呂に入った後のいつもの習慣で二人は裸のまま布団になだれ込んだ。紀子が泊まれる日のお定まりの儀式だった。

「今日は危険日ではない」という紀子に何処か嬉しそうな様子が垣間見えた。直接の触れ合いが彼女にはより心地よく感じられ、精神的にも高揚するらしい。正直なところ、それは男にも言える。だが危険を考えると結婚していかない男女が防具無しで毎回交歓する訳にはいかない。数少ない機会に紀子は最初から期待を膨らましていたように思えた。そしてその瞬間が突然のようにやって来た。

その日の一回目の交わりは意外とあっさりしていた。時間も大して掛ってなかったが彼女には何か下半身に予感をじみた感触があつたらしい。珍しく二回目の誘いが彼女からあつた。一回目が終わって一時間も経ってないので、不思議な思いをしたが私は素直に応じ

た。

二度目の行為が始まった直後から彼女の息
使いに何か切迫したものが感じられた。下か
ら彼女は強い力で腕を巻きつけ全身を硬直さ
せていた。

足をまっすぐ伸ばし、ブリッジ状に身体を
反らした状態で彼女の局部が私のもものに絡み
付いてきた。それはリズムカルに収縮を繰り返
返し、あたかも私のもものに吸い付くような感
覚があった。時間が経つに連れて今までに聞
いたことのない声で彼女は意味のないうめき
声をあげ始め、渾身の力で抱きついてきた。

繰り返された何度かの波の後、「やめて」
と甲高い声をあげた途端きつく抱きついてい
た腕を解いた。しかし彼女の局部は私のも
をさらに吸い続けていた。それに合わせる様
に長い射精が同時に始まっていた。

「死ぬかと思った」と彼女は単純な表現で
感想を述べた。

究極の快樂は彼女に死の恐怖を与えたらしい。おばちゃんも夫人も「死ぬ」という言葉で何度も絶頂の瞬間を表していたが、これは女性特有の快樂の感じ方なのだろう。彼女の目には涙が溢れていたが、本人は気が付いていなかった。女の絶頂は死と涙で迎えるものなのだろうか。

「すごく気持ち良かった。最後は自分でもどうなっているのか、分らなくなっていたの」

「何か声を出していたのは覚えているけど何を言ったのか覚えてない」

その夜は紀子の記念すべき日となった。そして一度通った道はその後確実に通ることが出来るようになった。

紀子は新しい出会いに彼女なりの感性で説明を加えた。切羽詰った崖淵で、それ以上進むと高い所から落ちてしまうという恐怖に襲われたらしい。今まで感じたことのない次元

の快感に、自分がどういふ状態になっているのか分からず怖くなったという。何度も押し寄せる経験したことが無い極度の快感に身体が耐えられず、思わず「やめて」と叫んでしまったらしい。

紀子が感じたことを男の私は想像するしかなかったが、どうも女性の感覚は男のものと違っているようだった。

紀子の営みに対する態度はそれ以来一変した。自分から積極的に求めるようになり、目に緊迫した表情が出てきた。短い期間で彼女は完璧な女へと成長した。身体はより敏感になり、胸を触るだけで声を上げ、身悶えるようになった。

「全身が性感帯になったみたい」
紀子は単純な表現で歓びを私に伝えた。彼女の性器は私のものに纏いつき、最後には私のものをあたかもしゃぶり尽くすような感じ
で包み込みいつまでも収縮を繰り返した。

この感じはおばちゃんにも夫人にも無かった。夫人は最後の瞬間きつく締め付け、時には痛く感じることもあった。だが紀子は営みの最中常に収縮を繰り返し、私の性器が何か齒の無い口で吸い続けられている感じだった。それは天性のもので、彼女の訓練や努力の結果ではなさそうだった。性に対する積極的な姿勢は、彼女に生れ付き内在している高度に発達した関連の器官が指令を出していたと理解すれば納得がいく。

彼女の外見や立ち振る舞いには何ら前と変わりはなく、あくまで清純な感じの紀子のままだった。だが中身は今では経験豊富なおばちゃんや夫人と全く遜色なかった。違っていたのは、紀子には二人を遥かに凌ぐ性に対する肉体的感性が備わっていたことだろう。学習や経験から得られた技巧ではなく、自然なままに肉体が天性に織りなす反応だった。

途中空白の期間がいくらかあったとしても私は性に関する実質上の経験はかなり積んでいた。まして夫人との濃厚な日々に加えて、その後の夫人と紀子との掛け持ちで私に休養の時間や、性に対する渴きの期間が無かった。それが私にとって気持ちのゆとりとなり冷静に対応出来たとも言える。がつがつとした、飢えた目では見えないことがあるが、余裕があるときはより本質が見極められるものだ。

紀子は性の喜びを「生きている証」と表現した。観念的にものを考える習性のある男には考え付かないが、言われてみれば分かるような気がする。本能に従い、発情した自分を持って余した経験のある男達は、むしろそういった己の姿に嫌悪の念を持つことさえある。それを紀子は「生きている証」と肯定的に捉えている。そこには自分は異常ではないかと悩んだ時期はあったが、罪悪感は無かったし後ろめたさも

なかつたらしい。彼女に大事なことを教えられた気がした。性は否定するべきものではない、という紀子の強いメッセージが感じられた。考えて見ればおぼちゃんも夫人も性を否定するような言動は無かったような気がする。許されるかどうかで悩んでいたのは男である私だけではなかったのだろうか。少ない経験の中から女性の本質が判ってきたような気がした。女性には羞恥心はあっても性に対する罪悪感など無く、性の快感も肯定的に捉え、男ほどには自慰行為にも罪悪感を覚えていないのだろう。そう考えれば彼女たちのことが何となく理解出来るような気がした。それともこれは私だけの独り善がりな結論だろうか。

ありの儘を素直に受け入れる姿勢は、何れにせよ女性の方が一歩進んでいるように思えた。

いざと言う時、腹が据わっているのは女性

だということが良く言われるのが理解出来た。彼女達は単に自然に振舞っているだけで、構えているわけではない。それが動揺し易い男から見ると落ち着いて見えるだけだ。生物学者の説によると動物の基本になるのは雌で、雄は単に多様性を求める繁殖のため存在するそうだ。動物の生き残りを賭けた究極の選択（進化）ともいえる。生物としての主役は雌だという説に何となく納得がいく思いがした。

夫人にも紀子にも私と関係を持つことに何の迷いも感じられず、精神的に不安定なのは私の方だった。若しかしたらこれも雄の習性かもしれない。

性の喜びを否定する理由はなく、人間としての生き方で言えば紀子の方がよっぽど正しいのだろう。主役である紀子に私は単に奉仕しているだけの雄かもしれない。

このところ、紀子の反応は日増しに敏感になり、ほぼ毎回のように絶頂を極めていた。

一回の行為で複数回絶頂の歓びを覚えた紀子は熟練した夫人の領域に一気に達していた。体の関係が始まってからまだ三ヶ月しか経ってなかった。彼女の学習は急速だった。

成熟した男女に極めて大きな影響力を持っているのに表で語られる事もなく、お互いに触れないことが大人の約束事のような、ものだった。性とはそういう位置づけしか出来ないものだろうか。あからさまに話題にすることで輦盛を買い、下品な人間との烙印を押される。性に目覚めた男の通過儀式として自慰にふける姿は決して美しいものではないかもしれない。だが、同じ様に知り合った女性達も自慰に励んでいた事実を知り、何かほっとするものを感じた。たった三人の例で全てを決め付ける訳にはいかないが、この推測は多分正しいのだろう。彼女らとの違いは、男の私には常に罪悪感が付き纏っていたことだった。

まさかと思っていたことが段々と解明され
自分にどう納得させるかが問題だった。
人妻との関係や未婚の学生同士の性的関係
は世間では認められてなかった。ましてやお
ぼちゃんとの関係はどう説明出来るのだろう
か。

約束事としがらみの中で生きている場合、
整合性を求める人間にはどうしても明快な答
えは出てこなかった。倫理・常識は常に行動
を制約し、そこからはみ出した時、原因は何
であれ、はみ出した自分を肯定する事は非常
に難しかった。これこそ若しかしたら雄特有
の悩みであり、男に与えられた原罪かもしれ
ない。性欲の発散が目的であることに、どう
理由付けをしても後ろめたさが残ってしまう
からだ。

下半身に厄介な爆弾を抱えて生きていくの
が発情の始まった男の宿命なのだろう。

知り合うまでのときめきと興奮は結ばれた時、頂点に達しその後はなだらかに新鮮さが失われて行く。ただ毎日蘇る性欲はその結びつきを継続させ、次の候補が出てくるまでは波乱無く続いていくことだろう。人の結びつきは肉体だけではないことを理解していても、一線を越した時から何かしら相手に対し重荷を背負った精神状態になり、必ずしも精神的に充足した毎日を送っていたわけではない。

極めて魅力的な中年女性と若い清楚で美しい女性を得たことに、私は単純に喜んでおられなかった。

人格や愛情が入り込まなければ事はもっと簡単で、精神的な重圧など入り込む余地はないだろう。ただ、動物として備わった性欲とその処理にはどうしても最終的な解決法として、異性という相手が互いに必要である。そのしがらみの中で精神的安定を求めて、あがいていただだけである。世間に認められない関

係が気弱な若造に、より負担になっていただけかもしれない。今やるべきはこんなことではないだろうという思いがいつも付いて廻っていた。性欲を肯定的に捉えることの出来ない若者の不毛な悩みだった。

それでも肉体の快楽は全てに優先し、私は二人の女性を手放すことが出来なかった。だが、こんな関係が何時までも続くとも思っていなかった。自分のかつての経験から、いいことは決して長く続いたことが無かったからだ。単純に今を喜べないのは悲観的に行く末を考える習性からかもしれない。理由の無い猿とした将来への不安感は何時頃から始まったのだろうか。少なくとも子供の頃には無かったことだ。物に憑かれたように読み出した文学書の数々が私に余計なことを考える習性を植え付けたのかも知れない。若しくはおぼちやんこのことが後ろめたい記憶として残り、全てに悲観的な結末を自分で選択していたのかもかもしれない。非常に不健康な若者だった。

人間は時として、それが単なる偶然の産物だとしても、取り返しの付かない局面に会うことがある。同時進行の二股交際は、自分は納得していても相手はその事情を理解して受け入れている訳ではない。日常の流れの中で漠然と身を任せていた馬鹿な若者の結末、としか言い様がない結果が待っていた。

ある日、夫人と交歓の最中に紀子が突然部屋に入ってきた。予定では紀子はゼミの後、懇親会があり遅くなるからその日は私のところに来る予定はなかった。それを確かめた上で夫人との時間だったのだが、紀子は持っていた合鍵で私を驚かそうと声も掛けず黙って入って来た。

昼過ぎの住宅街では夫人の時として高過ぎる喘ぎ声を消す為、私はラジオの音を高くして音楽番組を流していた。紀子の鍵を開ける音に気が付かなかったのはその為だった。

全裸で絡み合っている現場を見て、何も言わず冷静な表情で鍵を置いて出て行った紀子に強い拒絶の意志を感じた。夫人も紀子との関係を察したらしく営みの途中であったが、静かに脱いだものを着て出て行った。二人とも私の存在を無視したような態度で別れの言葉も無かった。

私も二人に掛ける言葉も思い付かず無言のまま見送った。

何か自分にもっとも相応しいような別れに納得している部分があった。救いの無い青春だった。

（二部終わり）